

よし なが
吉 永 遺 跡

— 平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —

1998

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

序

山口県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

財団法人 山口県教育財団では、私たちの郷土山口を築いてきた先人の足跡を今に伝えるため、地下に埋もれた歴史的遺産・遺跡を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録に留めて後世に残すべく、ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成9年度は、豊浦郡豊浦町大字吉永に所在する吉永遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代後半から古墳時代前半を中心とした集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活文化を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成10年3月

財団法人 山口県教育財団 理事長 上野 孝明

例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業に先立って平成9年度に実施した吉永遺跡（山口県豊浦郡豊浦町大字吉永地内）の発掘調査報告書である。
2. 吉永遺跡Ⅰ地区は、大字吉永字船頭及び大字吉永字植田に所在し、Ⅱ地区は大字吉永字池永に所在する。
3. 本書は、山口県農林部及び文化庁国庫補助を受けた山口県教育委員会の委託により財団法人山口県教育財団が実施した調査の成果を報告するものである。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団（山口県埋蔵文化財センター）

山口県教育委員会

調査担当 山口県埋蔵文化財センター 指導主事 藤川 貴和

同 伊藤 幸浩

山口県教育委員会文化財保護課文化財専門員 石井 龍彦

5. 調査にあたっては、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、豊浦町農林課、豊浦町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
6. 本書の第1図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「川棚温泉」を複製使用したものである。第2図は山口県下関土地改良事務所提供のものである。
7. 出土遺物のうち縄文土器については山口大学人文学部教授中村友博氏の指導助言を得た。石製品の石質鑑定は、山口県立博物館専門学芸員亀谷敦氏に依頼した。なお石質鑑定は表面観察によるものである。
8. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）の北で示し、標高は海拔標高である。
9. 本書に使用した土色の色調表記は農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帳』Munsell方式に従った。
10. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
11. 土器実測図について、断面黒塗は須恵器、網掛けは緑釉陶器を表す。
12. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB：住居跡、建物跡 SX：住居状遺構 SK：土坑 SP：柱穴 SD：溝状遺構
ST：埋葬跡
13. 本書の作成・執筆は藤川・伊藤・石井が分担作成し、藤川が編集した。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	3
III 調査の成果	
1. I地区	
(1) 遺構	7
(2) 遺物	19
2. II地区	
(1) 遺構	23
(2) 遺物	29
IV まとめ	34

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………2	第14図	出土土器実測図②……………21
第2図	周辺地形と調査区設定図……………5・6	第15図	出土木製品実測図……………22
I 地区		第16図	出土石製品・鉄製品・土製品実測図……………22
第3図	SB-1, 2実測図……………8	II 地区	
第4図	SB-3, 4・5実測図……………9	第17図	トレンチ北壁土層断面図……………23
第5図	SB-6, 7実測図……………10	第18図	II地区遺構配置・トレンチ設定図……………24
第6図	SB-8, 18, 9実測図……………12	第19図	SX-1, 2実測図……………25
第7図	SB-17, 15実測図……………13	第20図	SK-5, 13実測図……………26
第8図	SB-13, 14実測図……………14	第21図	SK-21, 36・37, 38実測図……………27
第9図	SB-10, 19実測図……………15	第22図	出土土器実測図①……………30
第10図	ST-1, 2実測図……………16	第23図	出土土器実測図②……………31
第11図	SK-11, 8, 16, 17, 15実測図……………17	第24図	出土土器実測図③……………32
第12図	SD-3実測図……………18	第25図	出土石製品・鉄製品実測図……………33
第13図	出土土器実測図①……………20		

付 図 I地区遺構配置図

図版目次

図版1	吉永遺跡遠景①(南東上空より) 吉永遺跡遠景②(若草山より)	図版9	出土遺物①
I 地区		図版10	出土遺物②
図版2	SB-1完掘(北東から), SB-2完掘(北から) SB-6完掘(北東から)	II 地区	
図版3	SB-7完掘(北東から), SB-8(北から) SB-10(北東から)	図版11	全景(北西上空より), 完掘全景(上空より)
図版4	SB-13(北から) SB-13・14(南東から) SB-13柱根検出状況	図版12	近景(北東から), 完掘全景(東から), 同(南から)
図版5	SB-17(北西から), SB-18(南東から) SD-3(北東から)	図版13	SX-1完掘(東から), SX-2完掘(北西から) SK-10完掘(東から)
図版6	ST-1完掘(北西から), ST-2完掘(西から) 包含層土器出土状況	図版14	SK-19土器出土状況 SK-20土器出土状況 SK-21完掘(南から)
図版7	SK-15土器出土状況 SB-1土器出土状況 SB-2竪櫛出土状況	図版15	SK-26完掘(西から), SK-31完掘(東から) SK-37土層断面(北東から)
図版8	南東部・北西部完掘状況	図版16	SK-37完掘(北西から) SK-38土層断面(南から) 包含層遺物出土状況(東から)
		図版17	出土遺物①
		図版18	出土遺物②
		図版19	出土遺物③

I 遺跡の位置と環境

吉永遺跡は、豊浦郡豊浦町大字吉永に所在する、弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。

豊浦町は、山口県の西端に位置し、北は豊浦郡豊北町と、東は豊浦郡菊川町と、南は下関市と境を接し、西は響灘に面している。北九州市及び下関市の経済文化圏に属し、農業と水産業を主産業とする町である。近年は、ほ場整備などの公共事業を中心に多方面にわたる開発が盛んに行われている。町域は、東西約7km、南北約15kmのほぼ長方形の広がりをもつ。北東部の狗留孫山(616.3m)から南東部の鬼ヶ城山(619.6m)にかけて標高300mを越える山々が連なり、それらの山地に源流を持つ川棚川・吉永川・黒井川などの小河川が町内を西流して響灘に注ぐ。平野部は、これらの河川の流域、主に町域の南西部に発達していて、概して東側の山地から西方の響灘に向かって傾斜している地形となっている。気候は、冬季に北西の季節風が卓越するが、沿岸を北上する対馬暖流の影響を受けて年間を通じて温暖であり、人々の生活に適した自然環境となっている。

吉永遺跡Ⅰ地区は、鬼ヶ城山を主峰とする鬼ヶ城山地から北西方向に派生した、標高10～30mの低平な、砂礫粘土からなる洪積台地の先端に立地する。この台地の北縁を吉永川が流れる。同じ台地上には、Ⅰ地区の南東側に隣接して船頭遺跡が立地する。両遺跡は、吉永川及びこれとほぼ平行して響灘に注ぐ黒井川が形成した沖積地に稲作中心の経済基盤をもつ、まとまった集落として展開していたことが推測できる。Ⅱ地区は、大門古墳のある花崗岩丘陵の北側の低地に立地する。Ⅱ地区の南の丘陵には弥生時代の土坑群を検出した大門遺跡があり、一帯に大規模な集落の存在が予測される。

響灘沿岸は、大陸や朝鮮半島、そして九州と一衣帯水の地にあつて、地形的・気候的条件に恵まれ、生活舞台としてふさわしい風土である。そのため、文化の先進地域および文化交流の接点としての役割を担ってきたということが様々な時代の遺跡が集中していることでもうかがえる。吉永遺跡周辺にも多くの遺跡の存在が知られている。以下に吉永遺跡と関わり深い時代である古墳時代までの歴史について概観してみる。

J R川棚温泉駅西方の磯上遺跡から旧石器が発見されている。これは、山口県域で人類がその歩みを開始した最古の例(約30万年前)である。町域における縄文時代の遺跡分布は希薄で、室津の法仙庵遺跡で晩期にあたる土器の出土例があげられるほかは、この時代の資料は極めて少ない。

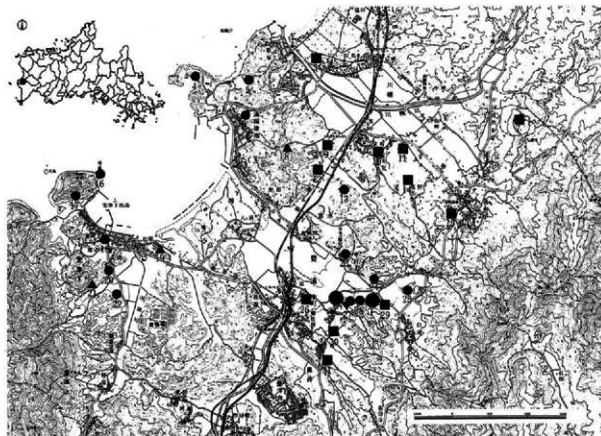
やがて、稲作農耕と金属器に象徴される新しい文化を受容して、弥生時代を迎える。文化の定着とともに集落が各地に形成されていった。確認されている遺跡数も格段に増加する。集団埋葬跡である中ノ浜遺跡をはじめとして、木製農具が出土した無田遺跡、貯蔵穴が検出された宝蔵寺遺跡、大規模な集落跡である高野遺跡等、多くの遺跡の分布を見ることで、人々がしっかりとした経済基盤を確立していったあとをたどることができる。一方、吉永遺跡から北東へ約3km隔たった所に標高193mの城山がそびえる。その山頂に弥生中期の高地性集落が確認されている。響灘沿岸のこの地域も緊迫した社会情勢のなかにあったことを示している。なお、今年度の調査対象地域の北側、吉永川対岸の台地上に吉永遺跡がある。ここから弥生時代の土坑が4基発見され、数点の土器とともに炭化米が検出されている。

吉永遺跡縁辺の小丘陵には、大門古墳をはじめとして、片山古墳、大年古墳群など複数の古墳の存在が報告されている。大門古墳は、墳丘長36m、円筒埴輪をもつ6世紀前半の前方後円墳である。大門古墳を除いた他の古墳については未調査であるため、それらの詳細は不明である。なお、大門古墳の北側の低地にある植田遺跡から、土師器・須恵器とともに銅鏡片が出土している。今回の調査では、大門古墳と吉永遺跡を関連づけられる資料は得られなかったが、古墳の築造とそれにかかわる集落の維持は、吉永川および黒井川流域の稲作農耕によって支えられていたと推測でき、植田遺跡のように大門古墳と関連性を持つと考えられる集落が吉永遺跡の周辺に埋存している可能性は高いといえよう。

(藤川)

参考文献

- 豊浦町史編纂委員会 「豊浦町史」, 1979年 「豊浦町史III 考古編」, 1992年
 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 「船頭遺跡」, 1994年 「船頭遺跡II」, 1995年
 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 「大門遺跡」, 1991年
 山口県教育委員会 「豊浦町吉永遺跡」『埋蔵文化財緊急調査概報』, 1972年



- | | | | | | |
|-----------|------------|---------|----------|----------|------------|
| 1 吉永遺跡I地区 | 2 吉永遺跡II地区 | 3 中ノ浜遺跡 | 4 青井古墳群 | 5 大道古墳群 | ▲ 旧石器・縄文時代 |
| 6 心光寺古墳群 | 7 城山遺跡 | 8 磯上遺跡 | 9 田島ヶ丘遺跡 | 10 林崎遺跡 | ■ 弥生時代 |
| 11 下岡遺跡 | 12 無田遺跡 | 13 無田古墳 | 14 高野遺跡 | 15 宝蔵寺遺跡 | ● 古墳時代 |
| 16 泊ヶ鼻遺跡 | 17 甲山古墳群 | 18 沙流遺跡 | 19 松原遺跡 | 20 間古墳群 | |
| 21 法仙庵遺跡 | 22 上岡田遺跡 | 23 片山古墳 | 24 大年古墳群 | 25 市之内古墳 | |
| 26 北岡古墳 | 27 大門古墳 | 28 植田遺跡 | 29 船頭遺跡 | 30 大門遺跡 | |
| 31 市遺跡 | | | | | |

第1図 遺構の位置と周辺の遺跡

II 調査の経緯と概要

1. 調査に至る経緯

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存が難しい遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施してきた。豊浦町でもほ場整備事業が進められており、最近では、平成5年度以降、毎年実施されている。吉永遺跡に隣接した「船頭遺跡」(1993・1994年)の緊急発掘調査もこの事業にともなうものである。

豊浦町吉永地区も県営ほ場整備事業の対象地となったため、山口県教育委員会は、平成6年度に埋蔵文化財の有無について、事前の調査を実施した。この結果、遺跡の存在が確認されたため、山口県教育委員会では山口県農林部耕地課と協議を行い、発掘調査を行うことになった。工事計画が示された平成8年度に再度予察調査を行い、20,000㎡の調査必要面積が判明した。

対象面積が広大であるため、調査期間を2年とし、調査は山口県農林部及び文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会の委託により、財団法人山口県教育財団が行うこととなった。

本年度は、発掘調査を必要とする範囲が、船頭遺跡に隣接する地区と大門古墳のある丘陵西側の地区の2カ所に分散したため、前者をI地区、後者をII地区として、両地区の調査を並行して進めていくことにした。本年度の調査面積は、両地区を合わせて約6,500㎡である。

2. 調査の経過と概要

調査は5月7日、I地区から開始した。予察の調査結果をもとに、まず重機によって遺構面近くまで表土除去を行い、その後の人力によって各遺構検出を行った。I地区の遺構検出は、調査対象範囲の高位側より順次進めた。I地区では、遺構は調査区のはほぼ全域にわたって分布するが、旧地形は、後世の水田開発によって、一部改変されており、そのため、遺構が削られて消滅した箇所もあることが判明した。遺構の分布を概観すると、方形竪穴住居跡がI地区の高位側にあたる南東部に6軒検出されたのに対し、低位側の北西部からは堀立柱建物跡が9棟検出されて、対照的な遺構の分布を示している。

I地区は、遺構面が吉永川に向かって傾斜しており、砂礫粘土からなる洪積台地の上に立地しており、低位側にある北西部での遺構検出作業は、礫を除去しながら進めていかねばならなかったため、予想以上に時間と労力を要した。遺構検出作業の状況を見ながら、平板による遺構配置図を作成していった。

II地区は、5月末に重機によって表土除去を行い、I地区の遺構検出終了後、7月下旬より遺構検出作業にはいった。II地区の遺構面は、砂質の層と粘土質の層が複雑に入り組んでおり、あらゆる層に多くの弥生土器・土師器片が含まれていた。そこで、土層の堆積状況を把握し、遺構面が単一であるか否かを確認するため、遺構の掘り込みに入る前に、トレンチ調査を行うことにした。東西、南北方向にそれぞれ3本のトレンチを設定し、人力で掘り込んだ。深いものは1mを越え、最深部の白色

粘土層まで全て掘り込むのに8月末まで、約1月を要した。トレンチからは多くの弥生土器・土師器が出土した。トレンチ調査の結果、大部分が単一の遺構面であることと、西部の厚い包含層の存在が確認された。II地区の遺構は弥生時代の土坑が中心で、ほぼ調査区全体にむらなく分布していた。当初II地区の南側に立地する大門古墳との関係が予想されたが、II地区の遺構とは時代が異なるということも明らかとなった。

I地区では7月中旬より、II地区は9月始めより遺構の掘り込みに入った。時代の新しいものから掘り込むことを原則とし、中世の柱穴・溝と思われるものから、土坑、住居跡の順で遺構掘り込みを行った。住居・住居状遺構については4分法で、土坑は2分法を用い、土層断面を観察・記録した後、完掘するという手順で進めた。遺構や遺物の写真撮影・実測は、各遺構の掘り込みが完了することに随時進めていった。

I地区の掘り込みは砂礫に妨げられ、II地区の遺構は巨大な土坑が多く、作業は困難なものとなった。また、本年度は、6、7月は長雨、8、9月は台風にたたられ、その都度遺構が風雨によって傷み、作業が中断し、予定が大幅に遅れることとなった。ただ9月中旬からは好天に恵まれ、徐々にペースを取り戻していった。

I地区の遺構掘り込みが完了した10月16日、ラジコンヘリコプターを使った遺跡全城の空中撮影を行った。その翌々日の18日には、現地説明会を開いた。地元の人たちを中心に約100名の見学者が遺跡を訪れ、検出した遺構や出土遺物を実見した。

10月下旬から、II地区の包含層掘り込みに全員で取りかかり、11月上旬に掘り込み作業を完了した。その後、完掘した遺跡全体の平面実測を行い、11月14日、現地におけるすべての調査を終了した。

(伊藤)



調査区の測量



慎重な作業



現地説明会



第2図 周辺地形と調査区設定図

Ⅲ 調査の成果

1. I 地区

(1) 遺構

遺跡が立地する吉永地区は、主として花崗岩に由来する土壤の分布地域で、遺構もこの土壤に掘り込まれている。調査によって、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡15棟、埋葬跡2基、土坑29基、溝状遺構12条、および1500余りの柱穴を検出した。遺構はI地区のほぼ全域に分布する。遺構の分布状況の特徴として、高位側にあたる南東部で7軒のうち6軒の住居跡が集中し、一方、低位側の北西部では、吉永川の流路に平行するように8棟の掘立柱建物跡が集中して検出されたことがあげられる。遺構は、後世の耕地化により、その上面をかなり削られ、あるいは消滅した箇所もあって、残存状況は良好ではない。

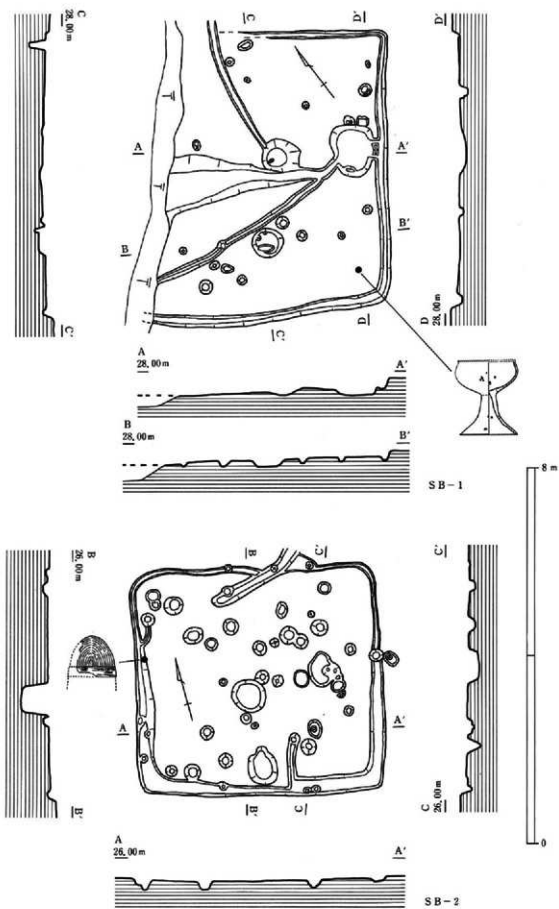
① 竪穴住居跡

I地区南東部で検出された6軒の竪穴住居跡は台地の縁辺に位置している。台地の周囲をとりまくような平面配置を読みとることができる。いずれの住居も平面形は方形で、周溝を有する。SB-6以外の住居の床面上に焼け締まった土が認められた。主柱を特定できる住居はSB-2、SB-6の2軒である。SB-6を除いて屋内土坑を持つ。住居跡が重複して見つかったのは一例のみである。時期は、SB-1が弥生時代終末、SB-2～6が古墳時代前半とみられる。SB-7は出土遺物が少ないため、時期決定が困難である。

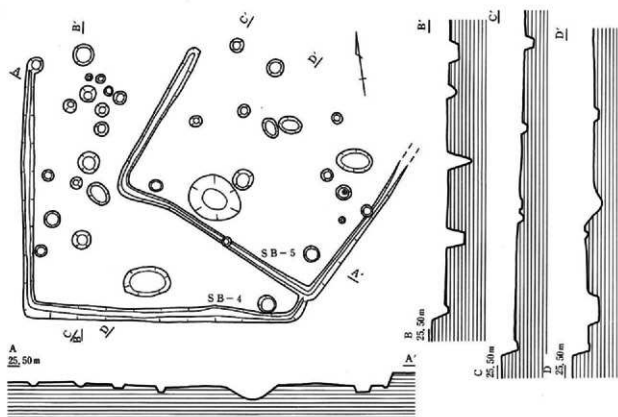
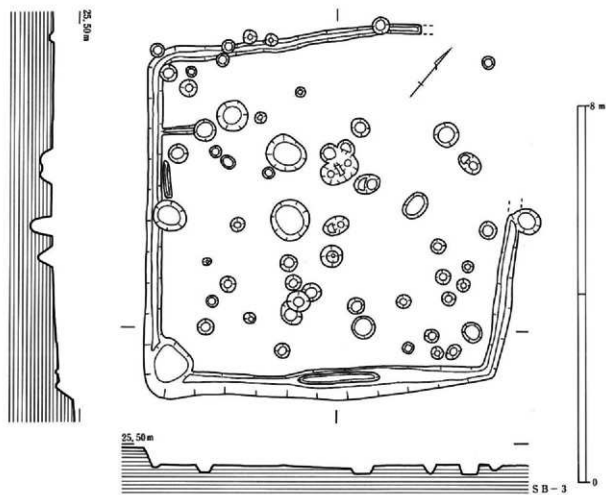
SB-1 (第3図、図版2) I地区の最も南側に位置する。住居の北西部は現畦畔によって切られ、推定される規模の70%を検出した。周囲を幅20cm、深さ7cmの周溝がめぐる。削平が著しく残存壁高は12cm。住居の東辺、周溝に接して直径60cm、深さ12cmの屋内土坑が掘り込まれ、そこから排水溝が低位側の屋外へ続く。この土坑近くの床面上に、作業台とみられる平石が置かれていた。中央部のふたつの屋内土坑は、ともに暗褐色の埋土中に炭を含み、炉跡と思われる。中央北側の土坑は長軸80cm、短軸70cm、深さ15cm。南側の土坑は、直径65cm、深さ14cm。南側土坑の周辺床面上には焼け締まった土が残っていた。

遺物は、住居南端の床面から高環(1)、東側土坑近くの床面から高環の脚部(16)、甕の底部(30)、低脚器台の脚部(34)などが出土した。

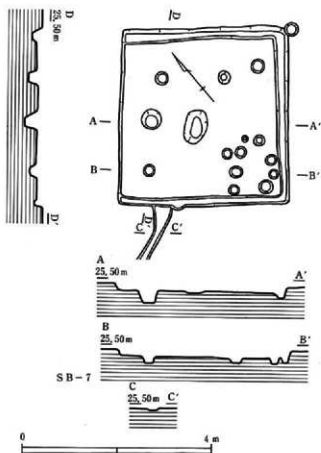
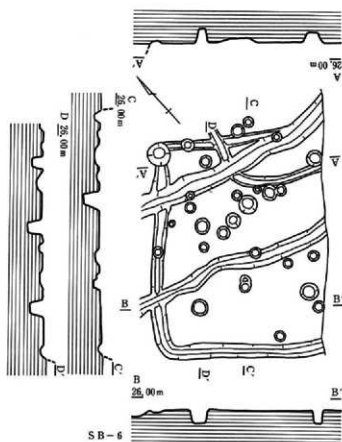
SB-2 (第3図、図版2) I地区の中で最も遺構の分布密度が高い箇所にある。東西5.2m、南北4.8mの規模をもち、周囲を周溝がめぐる。検出した住居跡の中では上部の削平が最も著しく、住居の南辺で残存壁高は10cm、北辺では床面まで削平が及んでいた。北側の周溝の一部はSD-3によって切られている。残存する周溝は、南辺で幅40cm、深さ7cm。北辺で幅10cm、深さ4cmである。主柱は4本でほぼ一定の間隔で配置されている。中央には直径70cm、深さ60cmの屋内土坑が掘り込まれている。南辺の屋内土坑は、長軸80cm、短軸60cm、深さ18cmで、黒褐色の埋土中に若干の炭を含んでいた。また、この土坑の周囲の床面上にわずかながら焼け締まった土が残っており、炉としての用途が考えられる。



第3圖 SB-1, 2 実測図



第4圖 SB-3, 4, 5実測図



第5図 SB-6, 7実測図

遺物は、住居南辺の床面から甕(4)・(6)・(36)、小型の鉢(33)、周溝からミニチュアの土器(24)・(31)、西辺の周溝に接して整櫛(72)が出土した。

SB-3(第4図) 南東部の先端に位置する。住居の北側部分は削平によって消滅している。一辺が7.2mあって、今回検出した住居跡のなかでは最も大きい規模をもつ。南側で最大25cmの壁高を残す。周囲を周溝がめぐる。周溝の幅は40cm、深さは7~10cmである。東辺で2mにわたって周溝が2条にわかれる箇所がある。中央部に、直径80cm、深さ15cmの屋内土坑を有する。埋土は黒褐色を呈する単層で、この土坑からの出土遺物はなかった。これより1.5m離れた床面上に長さ60cm、幅40cm、厚さ7cmの焼け締まった土が検出された。床面に多数の柱穴を検出したが、住居に伴う柱穴、および主柱を特定するのは困難である。

遺物は、住居東側の周溝から小型の土器(19)が出土した。

SB-4(第4図) 南東部の先端、SB-3に隣接する。東側をSB-5に切られる。北側部分は削平のため、消滅している。推定される規模は一辺5.8mの方形住居である。残存壁高は南辺で20cm。周溝は、幅20cm、深さ7cmで壁際をめぐる。南辺の周溝に接して長軸1m、短軸60cm、深さ29cmの屋内土坑が掘り込まれている。土坑

からの出土遺物はない。S B-5の周溝に接して、長さ50cm、幅40cm、厚さ9cmの焼け締まった土を床面上に検出した。住居の埋土は、褐色の単一層で、埋土中に多くの土師器片を含んでいた。

S B-5(第4図) S B-4と切り合い関係にある。削平を受けているため、推定規模の70%を検出した。残存する壁高は26cm。周溝は、幅20cm、深さ9cmの規模で周囲をめぐる。住居内のその他の施設として、S B-4と同様、両側の周溝に接するように平面楕円形の屋内土坑を有する。土坑埋土中にわずかに炭と焼土を含んでいた。住居の埋土中から土師器片が出土した。

S B-6(第5図、図版2) S B-2から東へ6mの間隔をおいて位置する。上面の削平が床面まで及んでおり、周溝と柱穴を検出した。支柱は4本で、長辺3m、短辺2.4mの間隔で配置されている。残存する周溝の幅は30cm、深さは8cmである。周溝と北側に配された支柱穴の埋土中から、数点の土師器片が出土した。

S B-7(第5図、図版3) 検出された竪穴住居跡のうち、唯一、I地区低位側にあたる北西部に位置する。長辺3.8m、短辺3.6mで、I地区の中で最も規模が小さい。残存壁高は15cm。周溝は、壁際の三方に掘り込まれている。周溝は幅が20cm、深さが12cmの規模を持つ。中央には長軸80cm、短軸50cm、深さ7cmの屋内土坑があり、この土坑中からまとまった焼土塊が検出された。土坑の周囲の床面上にも若干の炭が見られた。S B-7は礫層中に掘り込まれており、立地箇所から推して、住居以外の用途を目的とした施設であることも考えられる。

②掘立柱建物跡

検出した柱穴から、掘立柱建物を15棟復元した。建物の平面形式として主要なものに、梁行柱間数・桁行柱間数とともに2間の総柱建物、または櫓と推測できる施設を備えた建物、そして、大型の掘り方を持ち、柱間距離が4m以上を測る大規模な建物がある。掘立柱建物は、台地の高位側南東部に6棟、低位側北西部に9棟分布する。建物を構成する柱穴の規模や、棟方向の違いなどによって、集落が展開していた時期の変遷を見ることが出来る。

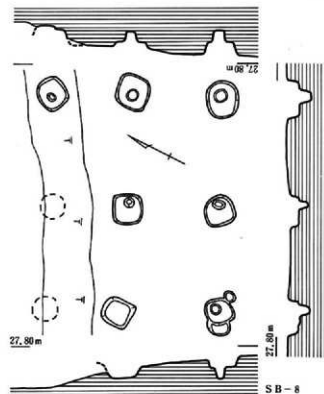
S B-8(第6図、図版3) 南東部の最も高位側に位置する、梁行柱間数・桁行柱間数ともに2間の総柱建物である。棟方向は、N62°E。現畦畔によってふたつの柱穴は消滅している。建物の規模は、梁行方向の長さは3.6m、桁行方向の長さは4.5mである。柱穴の掘り方は方形を基調とし、その規模は、最も大きいもので東西72cm、南北68cmの平面形をなす。掘り方の埋土は、褐色を呈する粘質土で、そのほぼ中央部を直径25cm、遺構面からの深さ60cmまで掘り下げて木柱を据えた建物である。梁行方向の柱間距離は1.8m、桁行方向の柱間距離は2.3mである。柱穴の埋土中からは、数点の土師器片が出土した。

同じ台地上に隣接する船頭遺跡からも平面形式がこれとは同様の規模を持つ掘立柱建物跡の検出が報告されている。

S B-18(第6図、図版5) 北西部の先端、I地区の最も低位側に位置する、梁行2間、桁2行間の総柱建物である。棟方向は、N51°Eで、建物の規模は、梁行方向で3.2m、桁行方向で3.8mである。柱間の距離は、梁行方向で1.6m、桁行方向で1.9mであり、整然と配置されている。柱穴は、にぶい黄褐色を呈する直径60cmの掘り方の中央に、直径20cm、深さ20cmの規模で掘り下げられている。

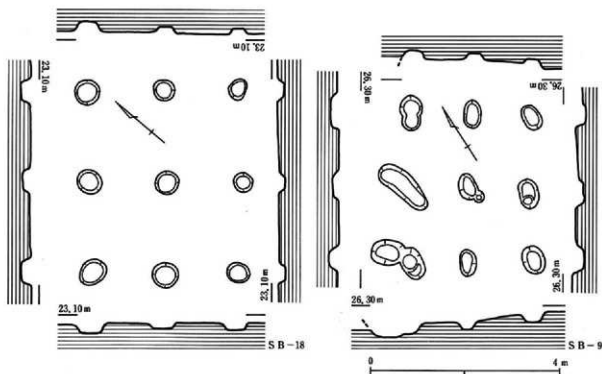
SB-9(第6図) 南東部の最も南側に位置する、梁行2間、桁行2間の総柱建物。棟方向は、N34°E。建物の規模は、梁行方向2.6m、桁行方向3.2mで、今回検出された総柱建物のなかでは最も小さい。建物を構成する柱穴は、平面形がほぼ長軸60cm、短軸40cmの楕円形で、造構面から20cmの深さに掘り込まれている。

SB-17(第7図, 図版5) 北西部、SB-18に隣接して位置する、梁行1間、桁行2間の建物。

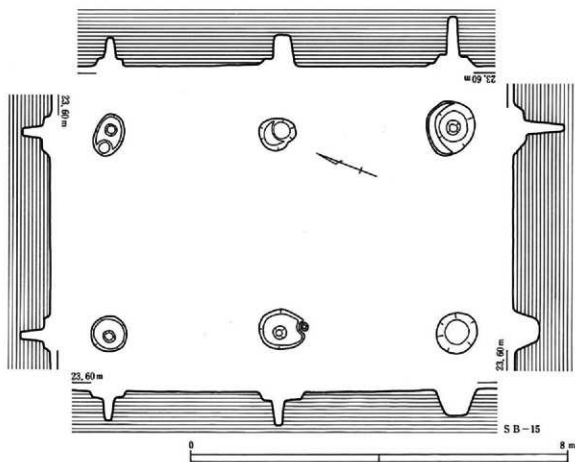
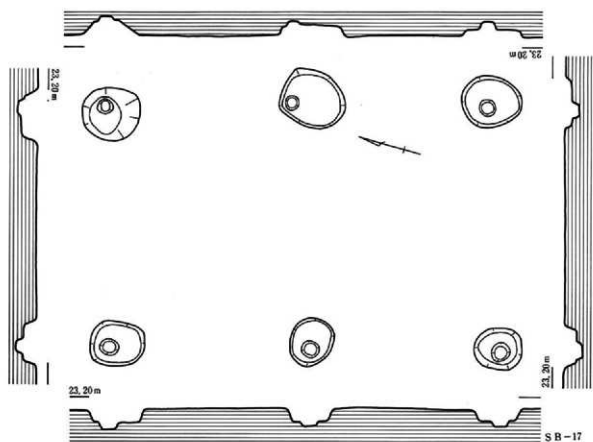


棟方向をN17°Wにとり、梁行方向5.2m、桁行方向8.3mの、検出した建物中最大規模を持つ。桁行方向の柱間距離は4m~4.3mである。柱穴は、長軸120cm、短軸90cmの楕円形の掘り方を持ち、その中に直径40cm、深さ40cmの規模で掘り込まれたものである。棟方向西側の柱穴には、黄褐色の埋土中に炭化材とともに焼け縮まった土が含まれていた。建物の廃絶に関わるものひとつとして考えられる。遺物が出土していないため、時期の特定は困難である。

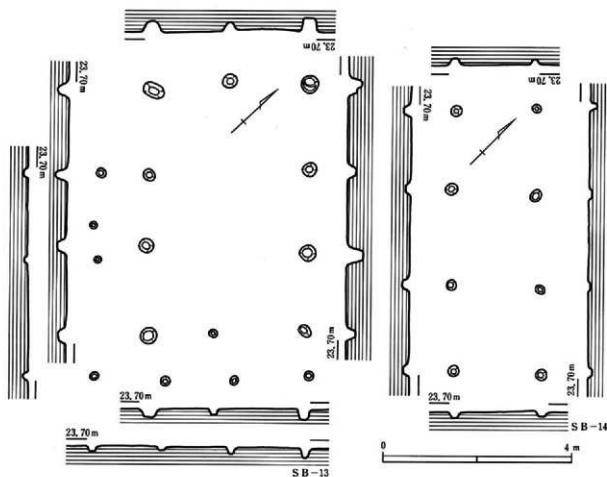
なお、このような大規模な建物跡の検出は豊浦町域では吉永遺跡が初例である。吉永遺跡の特異性を示すものである。



第6図 SB-8, 18, 9 実測図



第7圖 SB-17, 15実測圖



第8図 SB-13, 14実測図

SB-15 (第7図) 北西部のほぼ中央、SB-17に隣接して立地する。棟方向をN20°Wにとる、梁行柱間数が1間、桁行柱間数が2間の建物跡である。規模は、梁行方向4.3m、桁行方向7.4mを測り、SB-17に次ぐ大規模なものである。桁行方向の柱間距離は、3.6~3.8mである。柱穴は最も大きいもので、直径60cmの掘り方を持ち、その中を直径30cm、深さ70cmに掘り下げている。柱穴埋土からの出土遺物はなく、この大型建物跡もその時期判断はむずかしい。

SB-15の周辺では、SB-15を構成する柱穴と同じような規模をもつ柱穴をほかに多く検出した。たとえば、SB-15から西へ8m隔てた遺構面に、長軸80cm、短軸50cm内外の楕円形の掘り方を有する柱穴が整然と配列された状況が見られる(付図 I地区遺構配置図)。大型建物の建て替えあるいは、並立といったことが集落のなかで見られた可能性が考えられる。SB-17の検出も含めて、吉永遺跡の性格の一端を示す発見となった。

SB-13 (第8図, 図版4) I地区北西部の南端に位置する。棟方向は、N47°W。梁行2間、桁行3間の建物跡で、梁行方向3.3m、桁行方向5.2mの規模を持つ。柱間の平均は、梁行方向1.6m、桁行方向で1.7mである。柱穴は、直径30cm、深さ20cmの規模で掘り込まれており、うち、1基の柱穴には柱根が遺存していた。建物の西側と南側に検出した柱穴の列は、この建物に伴う塀または柵といった施設であると推測される。同様の建物跡は船頭遺跡に検出例が見られる。

SB-14 (第8図, 図版4)

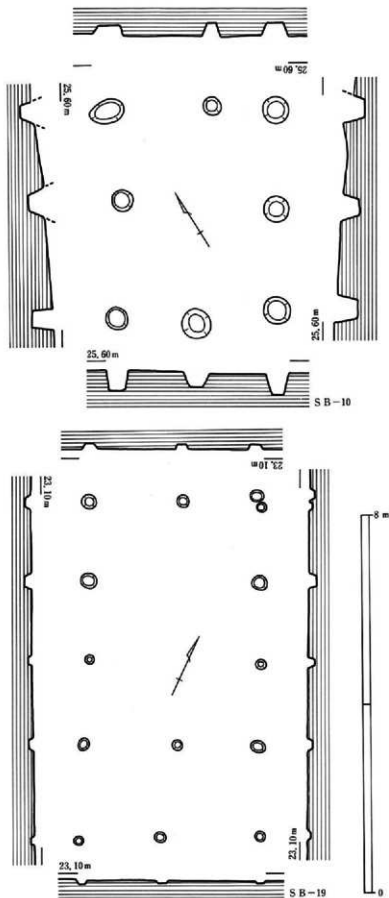
SB-13に隣接する。棟方向は、N45°W。梁行1間、桁行3間で、規模は、梁行長は1.8m、桁行長5.6m。桁行方向の柱間距離は、1.8mである。柱穴は、直径30cm、深さ20cmの規模で掘り込まれている。SB-13と棟方向を同じにとり、併設していることから、SB-13に附属する施設と考えられる。

SB-10 (第9図, 図版3)

南東部、SB-5の東側に位置する。梁行2間、桁行2間の建物で、棟方向を、N32°Eにとる。梁行方向3.5m、桁行方向4.4mの規模を持ち、平均の柱間距離は、梁行方向で1.7m、桁行方向で2.2mである。建物の北側は削平を受けている。棟方向西側の柱穴はSB-5の床面上で検出した。柱穴の規模は、直径40~60cm、深さは建物の南側で、30~40cmである。柱穴からの出土遺物はなかった。

SB-19 (第9図) 北西部の先端に位置する。棟方向はN25°W。梁行2間、桁行4間の建物で、梁行長3.8m、桁行長7.2mの規模を持つ。柱間の平均距離は、梁行方向、桁行方向ともに1.8m。柱穴は直径30cm、深さ15cmで掘り込まれている。

(藤川)



第9図 SB-10, 19実測図

③埋葬跡

今回の調査では2基の墓を検出した。2基ともI地区南東部高位側に位置する土坑墓である。

ST-1 (第10図, 図版6) I地区中央やや南寄りに位置する。西側に向かって傾斜した斜面に沿って墓坑が掘られている。墓坑の平面形は、長軸218cm、短軸70cmの隅丸長方形で、深さは約20cmある。長軸方向はN53°W。埋土は2層で、上層にふい黄褐色、下層が明黄褐色であった。下層の埋土中から、副葬品と推定される鉄製の刀子(67)が出土した。

ST-2 (第10図, 図版6) I地区の北東部、竪穴住居など遺構が密集した地域のはずれに位置する。墓坑の平面形は、長軸97cm、短軸65cmの隅丸長方形で、深さは約20cmある。長軸方向は、N19°E。土層は単一で、にふい黄褐色であった。埋土中から若干の骨片が出土した。

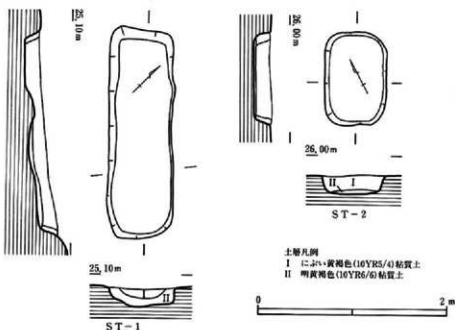
④土坑

今回の調査では、I地区で29基の土坑が検出された。平面形で言えば、長円形と円形が大部分を占める。大型のSK-17, 18, 25を除いて、大きさは似通っており、深さは10~40cm程度で浅い。埋土は単層が多い。

SK-8 (第11図) I地区のほぼ中央、緩やかな傾斜地に位置する。平面形は長軸88cm、短軸75cmの長円形で、深さ15cmを測る。長軸方向は、N27°W。埋土は褐色の単一層。埋土中から奈良時代の須恵器の環の底部(45)が出土した。

SK-11 (第11図) I地区のほぼ中央部、SK-8の北側に位置する。深い黒褐色の包含層の下から検出された。平面形は長軸147cm、短軸117cmの長円形で、深さ15cmを測る。長軸方向は、N20°W。埋土は褐色の単一層。埋土から奈良時代後半の環底部(41)が出土した。

SK-15 (第11図, 図版7) I地区東側、SB-3のすぐ北に位置する。平面形は長軸100cm、短軸60cmの長円形で、深さ19cmを測る。長軸方向は、N51°E。埋土は黄褐色の単一層。埋土からは古墳時



第10図 ST-1, 2実測図

代の高環環部(8)が出土した。

SK-16 (第11図) I地区北西部低位側に位置する。平面形は、直径約120cmの円形で、深さは10cmを測る。埋土は黄褐色の単層で、埋土からは奈良時代の須恵器の環蓋(38)が出土した。

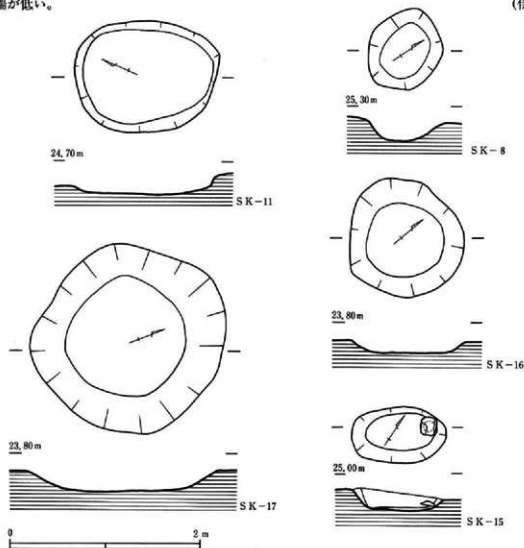
SK-17 (第11図) SK-16の北隣に位置。平面形は直径約200cmの円形で、深さは22cmを測る。埋土は、暗黄灰色の単一層で、中世の瓦質土器片が出土した。SK-16, 17の周辺は遺構が希薄で、前平を受けている可能性が高い。

⑤溝状遺構

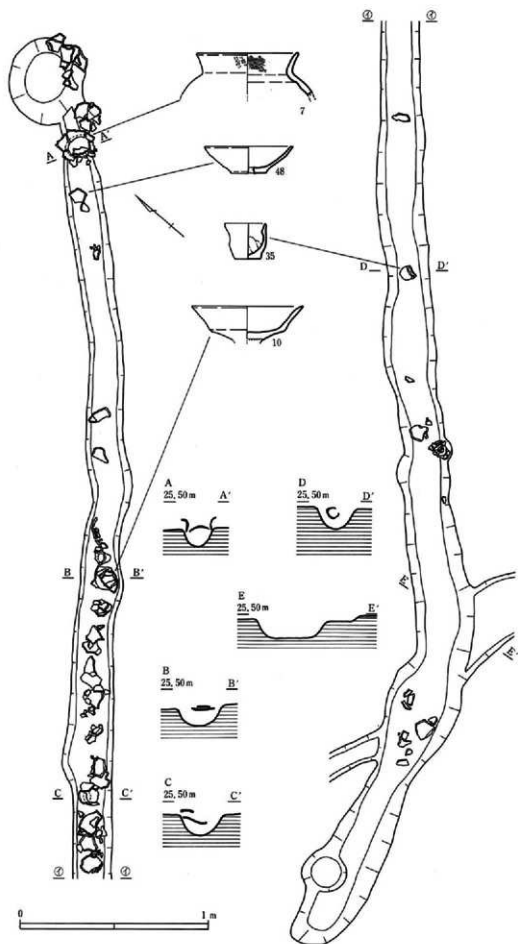
I地区からは、12条の溝状遺構を検出した。溝状遺構は、そのほとんどが東部の高位側に位置している。遺構は、上面の削平により一部が消滅しており、規模は小さい。

SD-3 (第12図, 図版5) SB-2とSB-3の間に掘り込まれ、長さ約8m、幅20~30cm、深さ5~15cmを測る。断面はU字形または台形。埋土は単層で褐色。南端は、SB-2を切っている。埋土中から、古墳時代前半のミニチュア鉢(35)、高環の環部(10)、甕の口縁部(7)と流れ込みとみられる平安時代終わりから鎌倉初めと思われる環の底部(48)が出土した。他にもミニチュアの鉢や、高環の破片が多く出土しており、祭祀に用いられた土器の廃棄が行われた可能性がある。溝自体は南側が高く北端が低い。

(伊藤)



第11図 SK-11, 8, 16, 17, 15実測図



第12图 SD-3 实测图

(2) 遺物

1地区で出土した遺物は、弥生時代から室町時代におよぶものである。具体的には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・青磁・白磁・瓦質土器・堅櫛・鉄製刀子・土釜・石製品(勾玉・鏃・庖丁・斧など)である。以下、遺構ごとに出土した遺物を取り上げ、記述を進めていく。

① 竪穴住居跡出土の遺物(第13~15図, 図版9・10)

1はSB-1出土の高坏である。体部は丸みをもち、口縁部は短く外反するものと思われる。脚部に焼成前の穿孔がある。里内での出土例はほとんどなく、北九州市高島遺跡等に類例がある。4はSB-2出土の甕である。くの字状に外傾する口縁部に球形の胴部が続く。外面にハケの痕跡がある。口縁部内面はナデ調整。6はSB-2出土の甕。口縁部はくの字状に外反する。内面に輪積みの痕跡がある。外面にハケ調整を施す。14はSB-2出土の高坏の口縁部である。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は面を持つ。16はSB-1出土の高坏脚部である。裾部はなだらかに開く。外面にわずかにハケ調整が見られる。19はSB-3出土の手捏ね土器。24はSB-2出土のミニチュア土器。輪積みの痕跡が底部に見られる。30はSB-1出土の甕の底部である。外面にハケ調整を施す。31はSB-2出土の手捏ね土器。33はSB-2出土の小型の鉢。内外面にナデ調整を施す。34はSB-1で出土した。低脚器台の脚部か。焼成前の穿孔がある。36はSB-2出土の丸底の甕の底部である。49は土師器の皿。埋土上層からの出土であり、流れ込みと考えられる。内外面にナデ調整を施す。72はSB-2出土の堅櫛である。頂部から結束部まで残存し、櫛歯は欠損している。結束部の現存値は2.1cmである。147はSB-1の埋土上層から出土した、青磁の碗。流れ込みによるものである。

② 土坑出土の遺物(第13・14図, 図版9)

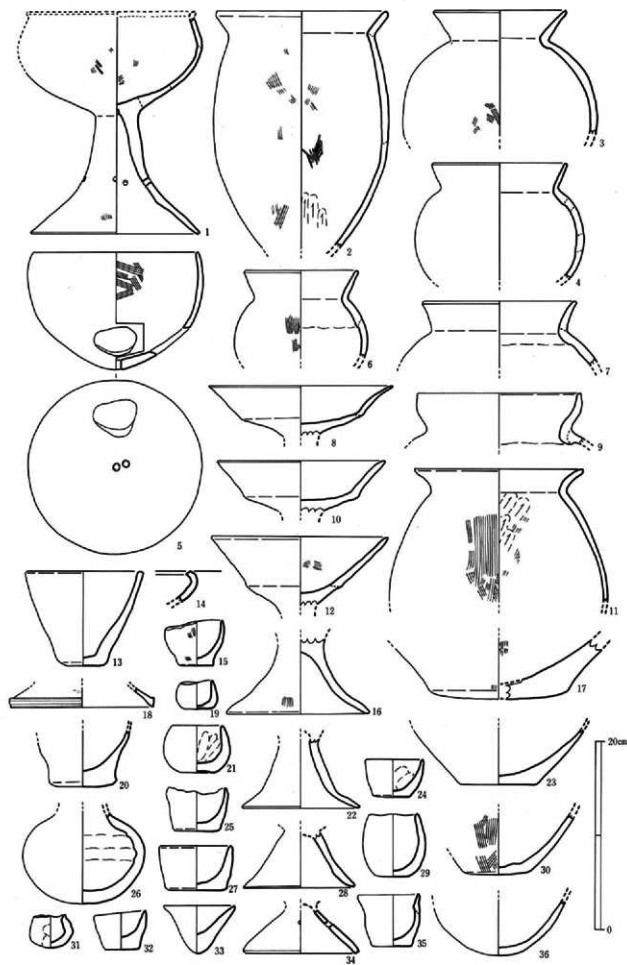
8はSK-15出土の高坏の坏部である。体部に明瞭な段があり、段より口縁部は弧を描いて外反する。口縁端部は尖り気味になっている。内外面とも調整は不明。12はSK-6出土の高坏の坏部である。口縁部が直線的にのびる。端部は丸みをもつ。内面にハケ調整を施す。38はSK-16出土の須恵器の坏である。器高が低く、端部を下方へつまみ出す。つまみの部分が欠損している。41はSK-11、45はSK-8出土の須恵器の坏の底部である。体部は外傾して立ち上がる。高古の端部は傾斜している。

③ 溝状遺構出土の遺物(第13・14図, 図版9)

7はSD-3出土の甕である。くの字状の口縁で、内面はハケ、外面はハケの後ヨコナデ調整。内面に輪積みの痕跡がある。10はSD-3出土の高坏の坏部である。明瞭な段を持ち、口縁部が外湾気味にのびる。13はSD-1出土の弥生土器の鉢である。底部から口縁部までやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部はヨコナデ。35はSD-3出土のミニチュア土器。口縁部に輪積みの痕跡がある。48はSD-3出土の坏である。底部は平底で体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。57はSD-2出土の土師質土器で、捏ね鉢。体部は上方に大きく開き、口縁外面を肥厚させている。内面はハケ調整、外面はナデ。

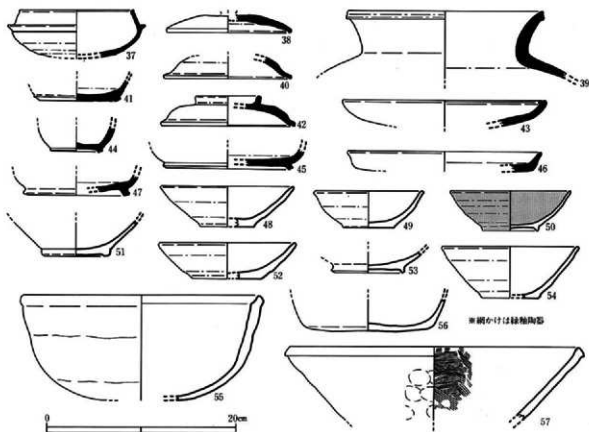
④ その他の遺構の出土遺物(第13・14図, 図版9・10)

2はSB-3付近の柱穴から出土した甕である。くの字状に曲がる口縁を持ち、口径は胴部最大径とほぼ同等の大きさである。胴部内面中位にヘラケズリの後ヘラミガキ、外面にハケ調整を施す。11はSD-9付近の柱穴から出土した甕。胴部に最大径を持つ。くの字に外反する口縁で、器壁が薄い。胴部外面にハケ調整を施す。17はSB-15の南側の柱穴から出土した弥生土器の壺の底部である。刻



1-16-30-34-SD-1, 4-6-14-21-31-33-36-SD-2, 8-SR-15, 12-SR-6, 13-SD-1, 19-SD-3, 35-SD-3, 2-11-17-18-20-22-25-27-29-32-柱穴, 3-5-7-15-23-26-28-包卷器

第13图 出土土器实测图①



38-SK-16, 41-SK-11, 45-SK-8, 53-SD3, 49-SB-1, 57-SD2
40-47-52-56 柱穴, 37-39-42-44-46-50-51-53-55-包含層

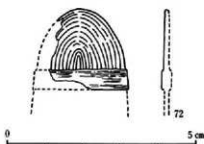
第14図 出土土器実測図②

み目を付した突帯のある胴部片とともに出土しており、これらは同一個体とみられる。内面にハケ調整を施す。18はSK-7の南側の柱穴から出土した弥生土器の高環の脚部。端部に2条の凹線を施す。胎土が他の土器と異なり、搬入された土器の可能性がある。20・25・27・32はST-1の東側の柱穴から一括して出土した。20は甕の底部である。25の内面にナデ上げの痕跡がある。27の底部内面に十字形のヘラの痕がみられた。40はSB-15の北側の柱穴から出土した环蓋。外面に丹塗りの痕跡がある。口縁端部を下方へつまみ出している。47はSK-27の東側の柱穴から出土した、須恵器の環である。高台がハの字状につき、体部は外傾して立ち上がる。48はSD-10付近の柱穴から出土した、平底の土師器の環である。底部外面に糸切り痕がある。56はSK-8の北側の柱穴から出土した瓦質土器で、壺の底部である。底部外面にヘラ描きの沈線が2条施されている。67はST-1出土の鉄製刀子である。刃部・茎部とも欠失している。

⑤ 包含層出土の遺物 (第13・14図, 図版9・10)

3は甕である。球形の胴部にくの字状に外傾する口縁部が続く。内面に輪積みの痕跡がある。5は丸底の鉢である。底部に径7mm程度のふたつの焼成前穿孔を施す。胴部には焼成後とみられる穿孔がある。外面に粗いハケ調整が見られる。9は口縁部がわずかに袋状を呈す、弥生土器の甕。口縁部内面にナデ調整を施す。15・29は輪積みの小型の土器。口縁部にナデの痕跡がある。21は手捏ね土器。22は高環の脚部である。脚部下位で屈曲し、裾部が開く。23は平底の壺の底部である。体部の器壁が薄い。26は壺の胴部である。内面に輪積みの痕跡が明瞭に見られる。28は高環の脚部である。内面にヘラケズリを施す。37は須恵器の環である。受け部から内傾して立ち上がり、端部に内傾する面をもつ。

39は須恵器の甕である。口縁は外反し、口唇部に凹みをもつ。胴部内面にタタキの痕跡がある。42は輪状つまみを持つ須恵器の坏蓋である。口縁端部を下方へつまみ出す。43・46は須恵器の甕である。44は須恵器の坏。ハの字状に短く開いた高台をもち、体部は内湾して立ち上がる。50は緑釉陶器碗である。土師器に薄い緑色の釉薬をかけたものであるが、摩滅が著しく、調整は不明。51は白磁壺の底部である。底部外面は露胎。53は土師器の皿である。



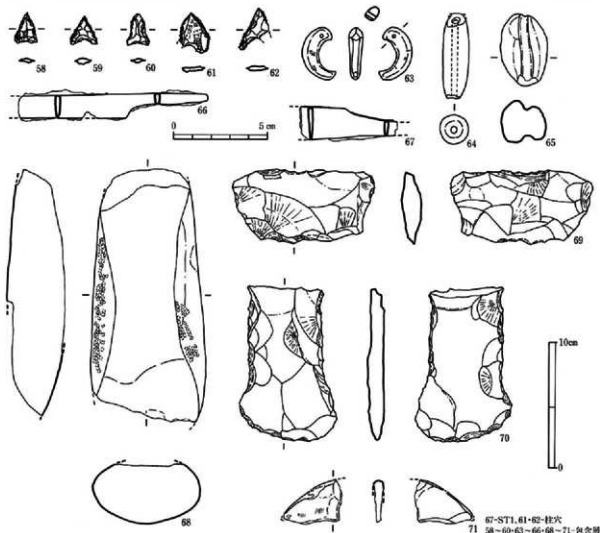
第15図 出土木製品実測図

糸切り後、高台を貼り付ける。内外面にナデ調整を施す。54は平底の土師器の坏。55は土師質土器の鍋である。体部は上方に大きく開き、口縁部は短く外反して肥厚する。

⑥出土石製品・鉄製品・土製品（第16図、図版10）

58～62は石鏃。石材は、58・61が黒曜石、59・60・62が玄武岩。5個体とも凹基無茎式である。63は石製勾玉。片岩を石材とする。64・65は土鏃。66は鉄製刀子である。刃部を欠失している。残存長は10cm。68は赤色頁岩を石材とする大型蛤刃石斧である。刃部を欠損しており、剝離が著しい。69は石庖丁の未製品、70は打製石斧の未製品とみられる。石材はともに赤色頁岩。71は直線刃半月形の石庖丁片で、石材は赤色頁岩である。

（藤川）



第16図 出土石製品・鉄製品・土製品実測図

2. II地区

(1) 遺構

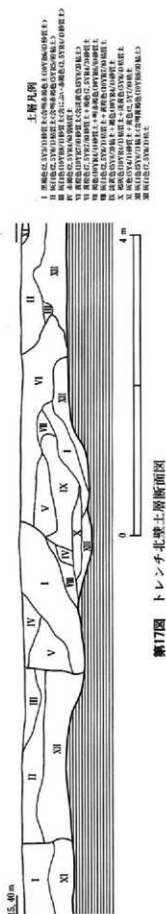
II地区は、大門古墳のある風化花崗岩丘陵北側先端の断崖下であり、I地区西から丘陵の東麓を下る谷と丘陵の西側にある大門丘陵との間を下る谷との交点にあたる。丘陵上の遺物の散布状態やII地区の遺物の出土状況からみて、集落の本体は丘陵上にあるものとみられる。なお、以前鏡片の出土が報じられた植田遺跡の一部である可能性が考えられたが、植田遺跡で推定されている5～6世紀の遺物は皆無であった。

平成8年12月の試掘調査により、地区内の土層の堆積順序や深さが、試掘坑によって、かなり違いがあることを確認した。そのため、表土および盤土のみを重機による除去対象とした。重機による除去が完了した段階で東側では遺構が検出されたものの、中央から西側では異なる何種類かの堆積土や黒褐色の遺物包含層の堆積がみられた。そのため、まず調査区全体に10mおきに幅60cmのトレンチを縦横各3本設定し、土層の堆積状況、遺構面の深さおよび遺構面が複数あるか否かを確認するための掘り込みを行った。トレンチ調査により堆積土や一部包含層下に土坑の存在が確認された。また地山直上面で縄文土器を含む柱穴が1個検出されたが、遺構はきわめて希薄であることが判明した。このため、土坑の掘り込まれた遺構面まで堆積土や包含層を人力で除去し、遺構の掘り込みを終えた後、残り部分の包含層の掘り込みを行った。

トレンチの土層観察では、いずれのトレンチも入り組んだ複雑な堆積状況が確認された。概略的には、粘土層と砂層が交互に堆積し、これは2方向から繰り返して土砂が流入し形成されたものと判断した。しかし、明らかに斜め下方向に直線的に入り込む土層やブロックを含み凹凸を繰り返す土層も確認された。その一部は風倒木に由来するものとみられるが、それでは説明不可能なものもあり、疑問を残す結果となった。

① 竪穴住居状遺構

SX-1(第19回、図版13) 4.0m×3.1mの方形プランの東辺中央に径80cmの半円形の掘り込みが付属する。深さは4～8cmと非常に浅く、周溝をもたない。柱穴配置は不規則である。増水時に土砂が流入したとみられる位置に存在し、日常居住用の竪穴住居とは考えにくい。中央土坑内の埋土や東辺付近の床面からは多量の焼土や炭が検出された。遺物は、床面から高環の杯部やジョッキ型土器の把手が、埋土中から連濁文をもつ壺の胴部片が出土したほか、鉄製品の小片や、黒曜石の刺片なども含まれていた。時期は弥生時代後期後半に比定される。



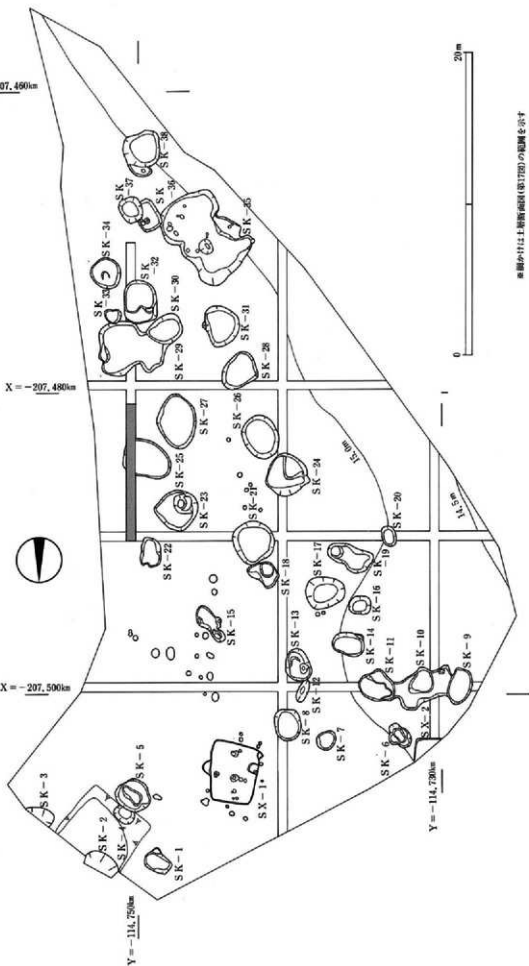
X = -207,460m

X = -207,480m

X = -207,500m

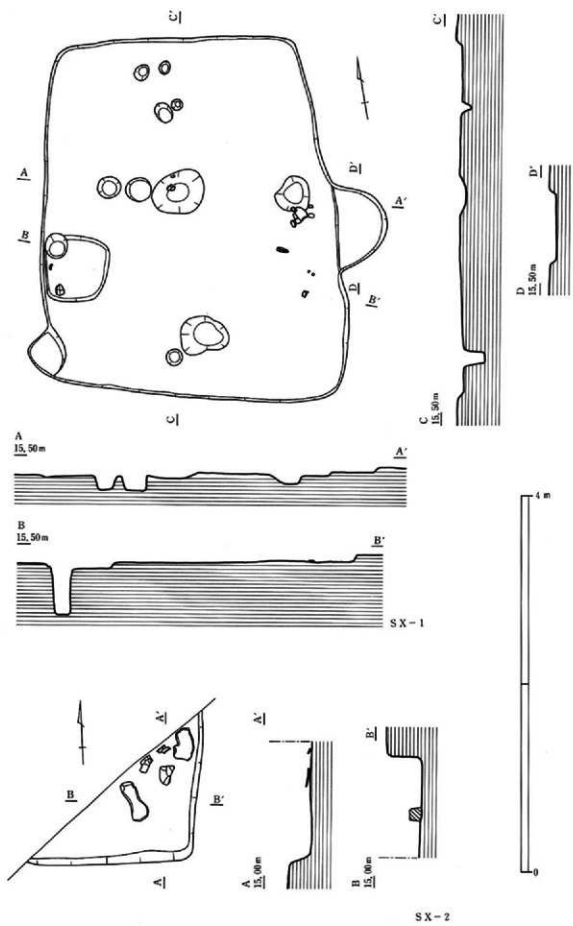
Y = -114,750m

Y = -114,730m



■ 網かけは上層構造(8172)の配置を示す

第18図 II地区道橋配置・トレンチ配置図



第19图 SX-1, 2 实测图

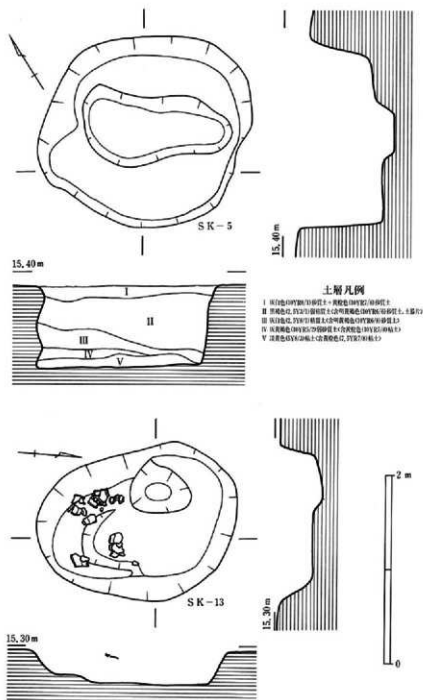
SX-2(第19図, 図版13) 調査区内にコーナーの部分のみが検出された。方形プランをもつと考えられ、深さは25-35cmを測る。調査区内では、柱穴は認められない。床面に貼り付いた状態で大型の砥石が検出された。この砥石は作業台を兼ねるものとみられ、どの面も良く使い込まれており、一端に熱を受けた痕跡がある。床面付近で検出された土器群は、弥生時代後期のものである。

② 土坑

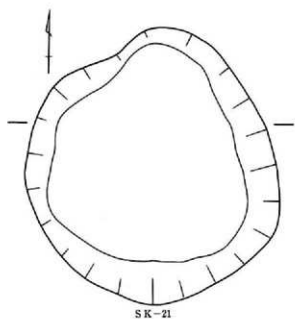
土坑は全部で38基検出され、調査区の中央を走る北北西-南南東ライン付近に集まっている。平面形がほぼ円形や隅丸方形を示すものは若干であり、大部分は不整形である。大きさと深さはまちまちであり、床面も凹凸のあるものが半数以上を占めている。

いずれの土坑も比較的土砂が流入しやすい位置にあり、床面が湧水点以下であるなど、いわゆる貯蔵用の袋状土坑とは様相を異にしている。出土遺物は縄文土器から古式土師器までであるが、量的には弥生時代後期の土器の出土量が卓越している。ここでは、いくつかの代表的な土坑について記述することにする。

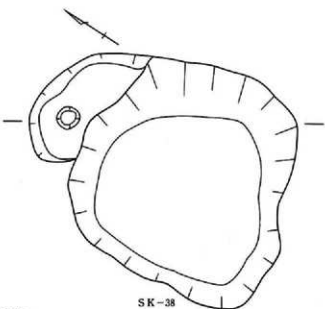
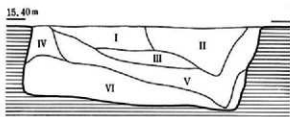
S K-5(第20図) 調査区東よりに位置する。東に攪乱坑があり、若干肩を削平されている。平面形は不整形円形で、中央に不整形長円形のくぼみがある。長径228cm、短径200cm、深さは床面まで90cm、中央のくぼみの底まで108cmを測る。白色粘土の地山に掘り込まれ、土層は最上位のI層と床面直上のIV・V層ではほぼ水平堆積、間のII・III層は西から東へ右下がりに傾斜する堆積となっている。遺物は主にIII・IV層中に含まれ、ほとんどが弥生中期の土器片および黒曜



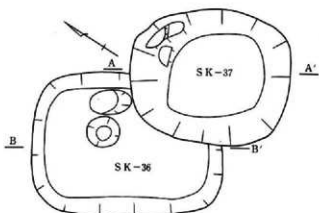
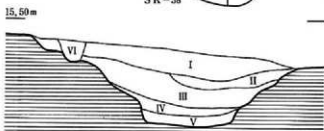
第20図 SK-5, 13実測図



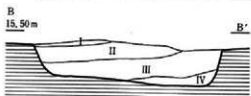
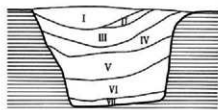
SK-21



SK-38



A
15.50m



0 2m

土層凡例

SK-21

- I 灰褐色C、SV6/D粘壤土
- II 灰褐色(D)YK2/砂粘壤土
- III 暗褐色(D)YK2/砂粘壤土
- IV 灰褐色C、SVK/砂粘壤土
- V 暗褐色C、SVK/砂粘壤土 + 灰褐色C、SVK4/砂粘壤土
- VI 灰褐色C、SV/粘壤土 + 灰褐色SVK/D粘壤土
(含少量赤褐色C、SVK/粘壤土)

SK-36

- I 暗褐色(D)YK6/D粘壤土
- II 暗褐色(D)YK6/粘壤土
- III 暗褐色(D)YK6/D粘壤土
- IV 暗褐色C、SVK/砂粘壤土

SK-37

- I 暗褐色C、SVK/D粘壤土 + 暗褐色C、SVK/D粘壤土
- II 灰褐色C、SV/D粘壤土 + 暗褐色(D)YK6/粘壤土
- III 灰褐色C、SV/D粘壤土 + 暗褐色(D)YK6/粘壤土 + 暗褐色(D)YK6/粘壤土
- IV 暗褐色C、SVK/砂粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土
- V 暗褐色C、SVK/砂粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土
- VI 暗褐色(D)YK6/粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土
- VII 暗褐色(D)YK6/粘壤土

SK-38

- I 灰褐色C、SV6/D粘壤土(含土層)
- II 灰褐色C、SV/D粘壤土 + 灰褐色C、SVK/D粘壤土(含泥)
- III 暗褐色(D)YK6/粘壤土 + 灰褐色C、SV/D粘壤土
- IV 灰褐色C、SV/D粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土
- V 灰褐色C、SV/D粘壤土 + 暗褐色C、SVK/粘壤土
- VI 暗褐色(D)YK6/粘壤土

第21圖 SK-21, 36·37, 38実測図

石の剥片である。

SK-13 (第20図) 調査区中央のやや東よりに位置する。平面形は不整長円形で、中央やや南よりの床面に段差があり、西端には不整円形のくぼみがある。長径212cm、短径160cm、深さ35cm、くぼみは68cm×48cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色弱砂質土の単一層で、埋土中位から弥生後期の甕や高坏の数個体の破片が集中した状態で出土した。

SK-21 (第21図, 図版14) 調査区のほぼ中央に位置する。平面形はやや不整の円形で、床面はほぼ平らに掘り込まれている。直径は270~290cm、深さは約80cmである。黄橙色の弱砂質土中に掘り込まれており、埋土は変則的な堆積状況を示している。中位から下位のⅣ~Ⅵ層は基本的に西から東へ下る堆積であるが、東端付近では壁面に沿う堆積となっている。上位のⅠ~Ⅲ層はくぼみに流れ込んだような堆積状況となっている。土層断面は北寄りの位置であるが、全体的にこのような堆積状況が認められた。人為的な埋め戻しが行われたものとみられる。遺物は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ層より弥生中・後期の土器片が出土した。

SK-36 (第21図) 調査区の南端よりに位置し、SK-37に切られている。平面形は隅丸方形で、床面はほぼ平らに整えられている。長辺の東よりに並ぶように2つのくぼみがある。長辺は208cm、短辺は152cm、深さは36~40cmを測る。床面東よりのくぼみは中央よりのものが、円形で径30cm、深さ30cm、東辺よりのものが長円形で45cm×25cm、深さ34cmである。埋土は南側より流入した自然堆積状況を示している。遺物はⅡ・Ⅲ層から弥生土器片が少量出土した。

SK-37 (第21図, 図版15・16) SK-36を切っている。平面形は不整隅丸方形で、床面はやや北下がり傾斜するが、凹凸なく滑らかになっている。長辺170cm、短辺143cm、深さ108cmを測る。埋土は典型的な自然堆積状況を示している。遺物は、Ⅲ~Ⅴ層より弥生後期の土器の細片が出土したのみである。

SK-38 (第21図, 図版16) 調査区の最も南よりに位置し、黄白色の粘土中に掘り込まれている。平面形は不整円形で、北に不整半円形の浅い掘り込みが付属している。長径262cm、短径225cm、深さ80cm、付属の掘り込みは径136cm、深さ16cmを測る。土層は中心よりかなり北東側のものであるが、概ね自然堆積の状況を示している。遺物は主にⅠ~Ⅲ層から出土し、弥生後期前半の甕などの破片が含まれている。

③ 包含層

調査区の中央南西(SX-2・SK-6~SK-11~SK-14~SK-17~SK-21~SK-27~SK-30~SK-35)以西は多量の土器片を含む黒褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロックを多量に含む)に覆われていた。包含層はトレンチで区画されたグリットごとに掘り込みを行ったが、その結果、縄文土器を含む柱穴1基が確認された。この包含層は、縄文時代後期の土器片や打製石斧、弥生時代前期の土器片、中後期の土器片や石包丁、石鎌、未製品や剥片、古墳時代前半の土器片を含む。この内、最も量的に多いのは、弥生時代後期後半のものである。

(2) 遺物

①土器

縄文土器 (第22図73~77, 図版17)

73~77は深鉢である。73は口縁部で、比較的直線的に立ち上がり、内面は口縁直下で屈曲する。外面は口縁直下に凹線を施す。器面調整は貝殻条痕である。74は口縁部である。端部はやや厚く立ち上がりはやや内湾気味である。内外面とも貝殻条痕調整である。75は胴部である。内外面とも貝殻条痕調整である。76は口縁部である。外面の口縁直下に一条の凹線がみられる。内外面とも貝殻条痕調整である。77は口縁部である。76と酷似しており、直接接合しないものの同一個体の可能性がある。以上の土器は岩田Ⅲ類の範疇に入り、縄文時代後期後半に比定できる。

弥生土器・土師器 (第22図78~第24図134, 図版17~19)

78は壺である。2片とも同一個体で、外面に連弧文を施す。79・80・81は壺である。79・81は頸部と胴部の境にわずかな段をもつ。いずれも文様はヘラ描き羽状文である。79は文様帯の上位に2条のヘラ描き沈線をもつ。79~81は弥生時代前期後半に比定できる。

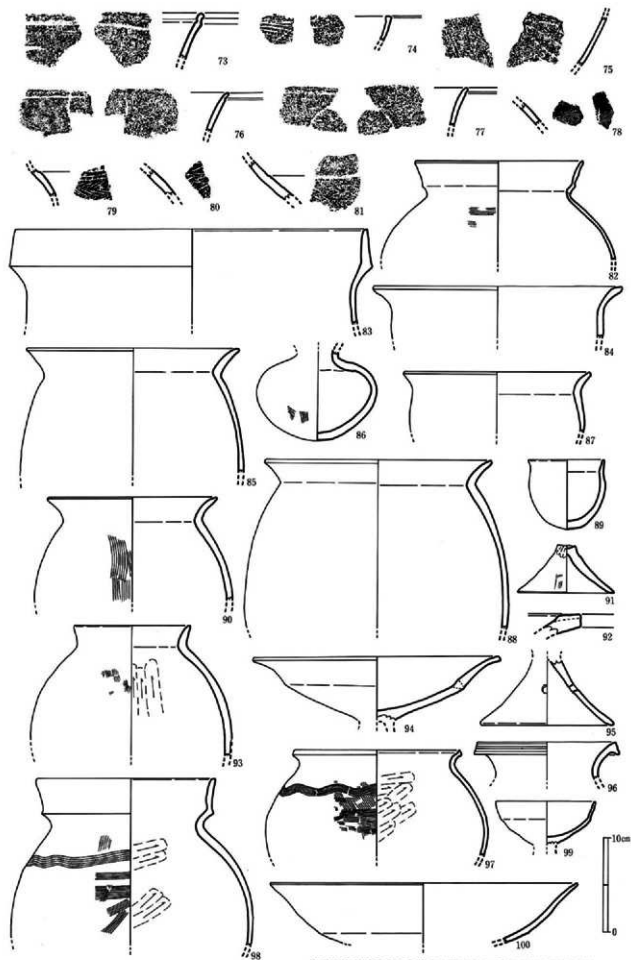
92・118・131は壺である。92は朝顔形に開く口縁部に肥厚帯を付す。118は口縁部が大きく外反し上面は水平となり、内面突帯をもつ。端部には連続山形文を施す。131は朝顔形に開く口縁部端上面に、立ち上がり部を付す。立ち上がり部外面には2条の沈線を施す。106・114は甕の口縁部である。106は大きく外反する口縁部に直立する立ち上がり部を付す。端部はやや丸みをもつ。114は口縁部上面をほぼ水平とし、外面はやや膨らみ気味となる。端部は外面は長く、内面は短く張り出す形状である。亀の甲式の影響によるものである。以上の土器は弥生時代前期末~中期初頭に比定できる。

96・102・104・112は壺である。96は口縁端部を斜め下方外へ拡張する。端部外面に2条の凹線を施す。胎土は緻密であり、搬入品の可能性がある。102は下垂口縁で口縁部の外面端部に粘土帯を貼り下垂部とする。104は外反する口縁の端部をやや上下に拡張し、端部に2条の凹線を施す。112は大きく外反する口縁部の上面がほぼ水平となり、端部はやや下降気味となる。端部外面は面をもち、連続山形文を施す。以上の土器は、周防・西瀬戸内の影響が強い。意外なことに九州系の土器は量的に少ない。132は甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部は面をもつ。胴部最大径は上位にある。外面はハケ、内面はヘラミガキ調整である。以上の土器は、中期中葉から後半に比定できる。

91は甕蓋とみられる。つまみ部から裾部へ山形に開く。他器種の蓋の可能性もあり、時期は不明。113・115は甕である。113は上胴部は内傾して立ち上がり、口縁部はくの字形に外反する。口縁外面は屈折し、やや複合口縁気味となる。端部は外方へ開く。115は113に比べ立ち上がり部が長く、端部は丸みをもつ。後期前半に比定される。

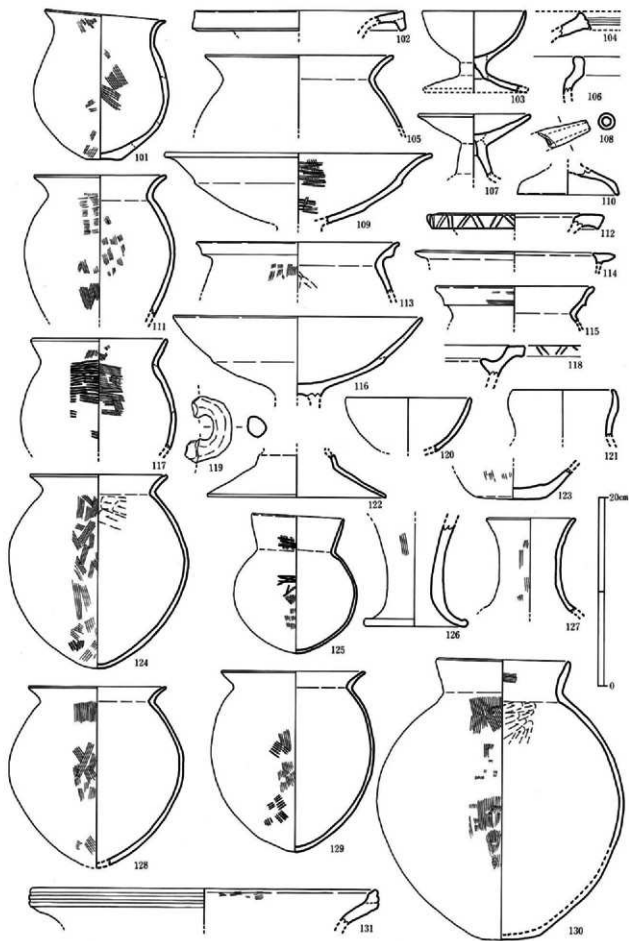
以下の土器は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に比定される。入り交じった状態で出土しており、以下では必ずしも時代順表記を行っていない。

83・86・121・125・127は壺である。83は大型の壺で、やや長い頸部から口縁部が外反し、外面に稜をもってわずかに内傾する立ち上がり部が続く。端部はやや丸みをもつ。86は胴部は偏球形で底部は丸底に近い。長頸壺とみられる。121は退化した袋状口縁である。125は口縁部が直線的に外傾し、端部は細い。胴部は球形に近く、底部は丸底である。127は長頸壺で、頸部は緩やかに弧を描く。



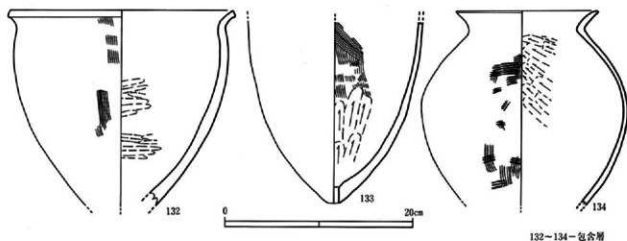
71-SK-25, 77-SK-10, 79-SX-1, 79-SK-31, 81-SK-28, 82-84-87-SK-2, 85-88-90-93-94-SK-13
 89-89-SK-20, 91-92-89-SK-35, 95-97-98-110-SK-18, 99-SK-23, 73-75-79-80-空白罎

第22图 出土土器实测图①



101-102-111-117-SK-19, 103-105-109-SK-33, 113-SK-38, 116-118-SX-1, 130-SK-25, 104-110-108-108-110-112-114-115-118-120-129-131-各分册

第23图 出土土器实测图②



第24図 出土土器実測図③

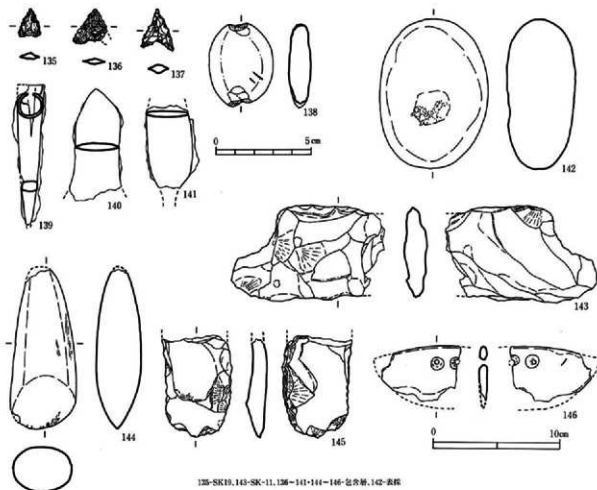
132-134-包含層

82・98・84・85・87・88・93・97・101・105・111・117・123・124・128・129・130・134は甕である。82は口縁部外面に稜をもち、立ち上がり端部は丸みをもつ。98は弧を描いて外反する口縁部に、外面に稜をもって立ち上がり部が続く。上胴部外面に粗雑な櫛描き波状文を施す。84は口縁部が緩やかに弧を描いて外反し、端部は丸みをもつ。85は口縁部がくの字状に外反し、端部はやや丸みをもつ。87は口縁部が緩やかに弧を描いて外反し、端部は面をもつ。88は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや丸みをもつ。93は口縁部は弧を描いて外反し、端部は細い。胴部は球形に近い。97は口縁部が弧を描いて外反し、端部は上方へつまみ上げる。胴部は球形に近く、上胴部に櫛描き波状文を施す。101は口縁部が弧を描いて緩やかに外反し、端部は細い。底部はわずかに平底を残す。105は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや丸みをもつ。111は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや薄い。117は口縁部が緩やかに外反し端部はやや丸みをもつ。外面はタタキ調整である。123は底部がやや凸レンズ状を呈する。124は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや丸みをもつ。底部はほぼ丸底である。外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ調整である。128は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや薄い。129は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや丸みをもつ。底部は丸底である。外面はタタキの後ハケ調整である。130は口縁部がくの字形に外反し、端部はやや薄い。底部は凸レンズ状を呈す。134は口縁部がくの字形に外反し、端部は薄い。外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリである。133は甕の胴部から底部である。底部はやや尖り気味となり、中央に焼成前の穿孔がみられる。

89・120は鉢である。89は口縁部が緩やかに外反し、端部は薄い。胴部は球形に近く、底部は丸底である。120は体部から口縁部にかけて半球形に立ち上がり、端部はやや薄い。高環の可能性もある。

94・95・99・100・109・110・116は高環である。94は体部で屈折し口縁部は外反する。端部は面をもつ。95は裾に向かってなだらかに開き、端部はやや丸みをもつ。中位に穿孔がみられる。99は体部で屈折して立ち上がり口縁部に至る。端部はやや薄い。100は体部中位で屈曲し、口縁部は外反気味に立ち上がる。端部はやや丸みを帯びる。109は体部中位よりやや上で屈折し、口縁部は外反気味に立ち上がる。端部はやや丸みをもつ。110は裾に向かってなだらかに開き、下方へ屈折する。116は中位でわずかに屈折し口縁部は内湾気味に緩やかに立ち上がり端部はやや薄い。

103・107・122・126は器台である。103は受け部は半球形で、端部は薄い。脚部は裾に向かって大きく開く。107は受け部は浅く、端部はやや丸みを帯びる。脚部は下方で屈折して外方へ開く。122はい



135-SK19, 143-SK-11, 138-10, 144-146-包券群, 142-表版

第25図 出土石製品・鉄製品実測図

いわゆる鼓形器台でくびれ部以上を欠く。126は裾は大きく開き端部はやや肥厚して丸みを帯びる。

108は土器の注口部である。やや先端が細くなり、外面はナデ調整である。119はジョッキ形土器の把手である。本体に把手のつけ根を埋め込んで取り付けたものとみられる。

②石製品（第25図135～138, 142～146, 図版19）

135～137は石鏃である。135は平基無茎式、136・137は凹基無茎式、石材は135・137が玄武岩、136は黒曜石である。138は石鏃である。円盤の両端を打ち欠いている。石材は赤色頁岩である。142は敲石である。片面に敲打痕が残る。石材は砂岩である。143は石器の未製品である。製品名は明らかでないが、図の下方を刃部に仕上げようとしたものらしい。石材は赤色頁岩である。144は磨製石斧である。器面は丁寧に研磨しており、刃部には使用痕がみられる。石材は蛇紋岩である。145は打製石斧の先端部である。石材を割って平板とした後調整剥離を行い、刃部を作り出している。石材は赤色頁岩で、縄文時代のものである。146は石廬丁片である。外湾刃半月形であるが、刃部と本体の半分弱を欠失する。器面は丁寧に研磨しており、穿孔は両面穿孔である。石材は赤色頁岩である。

③鉄製品（第25図139～141, 図版19）

139は石突きのような製品とみられる。先端部近くでは断面形が長方形となり、上部では円形に間に隙間がある。径が小さく、用途に疑問が残る。140・141は鏃の破片である。いずれも欠損部があるが、140は有茎陽挾三角形形式、141は柳葉式とみられる。

（石井）

Ⅳ ま と め

吉永遺跡の発掘調査は、次年度も継続して行われる予定であり、遺跡の性格の判断は全容の把握を待って行う必要がある。ここでは、今回それぞれの地区で検出された遺構・遺物について述べるとともに残された課題を明記して、今後の調査に役立てていきたい。

I地区は、字船頭・植田に位置する。地形的にみて、平成5・6年度に調査された船頭遺跡⁽¹⁾と一連の遺跡と考えてよい。I地区の高位側に隣接する船頭遺跡では、弥生時代・古墳時代・古代・中世の集落跡が検出されている。以下では、この船頭遺跡との関係に留意しながら、吉永遺跡の時期や特徴などについて考えてみたい。

I地区

弥生時代終末期から古墳時代前半にかけての竪穴住居跡は7軒検出された。うちSB-7は後にII地区の中でのべる竪穴住居状遺構（工房跡）の可能性が高い。他の6軒はいずれも地区の高位側に位置し、SB-1以外は東に密集している。SB-1は最大級の規模をもつ終末期の住居であり、集落内の有力者の住居と考えられる。船頭遺跡ではII・III・V地区より古墳時代中頃の方形住居が発見され、高位のI・IV地区では検出されていない。すなわち、弥生時代終末期から古墳時代中頃にかけては、船頭II地区から吉永I地区高位側が居住区となっている。中でも吉永遺跡の住居の方がより古く、この範囲の中で数軒の住居からなる集団が徐々に高位側に移動しながら、200年前後の間居住したものとみられる。なおSD-1は、位置と出土土器の共通性から船頭遺跡V地区SD-24の下流部分と考えられる。

I地区の高位側で発見された柱穴群は、埋土が竪穴住居と同様のものが多い。これらの柱穴群のいくらかは、高床式の倉庫を構成する柱穴であると考えられる。豊浦町は、宝蔵寺遺跡⁽²⁾、山ノ神遺跡⁽³⁾、無田遺跡⁽⁴⁾、向日山遺跡⁽⁵⁾、城山遺跡⁽⁶⁾、吉永遺跡⁽⁷⁾などにみられるように弥生時代前期末～中期には貯蔵用の袋状竪穴が多くつくられる地域である。ところが、吉永遺跡I地区では、いわゆる袋状竪穴は皆無である。これは他地域でもみられるように貯蔵形態が貯蔵穴から高床式倉庫へ移行した結果と考えられる。なお、同様の傾向は町内川棚の高野遺跡⁽⁸⁾でも確認されている。

SB-2から出土した竪櫛は、古墳時代前半のものと考えられる。県内での竪櫛の出土は山口市赤妻古墳⁽⁹⁾および田布施町木ノ井山古墳⁽¹⁰⁾出土の3点が知られている。しかし、竪穴住居からの出土例はこれまでほとんどなく、櫛が生活に結びついた遺物であることを示す貴重な資料となった。

巨大な建物跡（SB-15、17）は、柱穴の大きさ、柱間距離とも一般的な掘立柱建物としては異例である。柱穴からの出土遺物がほとんどないため、時期を確定することは難しい。ここでは他の手がかりをもとに、若干の推定を試みるにとどめたい。I地区の遺構・遺物の多くは弥生時代後期後半から古墳時代前半のものが最も多い。次に検出された古代の建物跡は一間の間隔がほぼ規格通りである。また中世の建物跡は柱穴規模が小さく、柱間距離も一間に近い。以上のことからみて、検出された巨大な建物跡は、弥生時代後期後半から古墳時代前半の可能性が高いと考える。その場合、建物の性格は、望楼または神殿、首長の住まいなどが考えられ、非常に興味深い。次年度の調査で同様の建物跡の明確な時期決定を期待したい。

調査区の最も南寄りで見えられた建物跡（SB-8）は、9本の総柱建物とみられる。柱穴は、方形の掘り方の中に円形の柱穴を掘り込む。出土した遺物から、奈良時代の建物跡と考えられる。SB-18は、上部が削平され柱穴は円形部のみであるが、同様の規模と似通った棟方向を示し、同一時期の建物跡の可能性が高い。船頭遺跡V地区SB-67も同方向、同規模の建物跡である。船頭遺跡Ⅲ・V地区から吉永遺跡I地区一帯に、律令期の計画的に配置された建物群が存在した可能性がある。

吉永遺跡では中世の溝や建物跡は比較的小さい。隣接する船頭遺跡でも吉永遺跡に近いⅢ・V地区では中世の遺構は比較的小さい。高位のI・IV地区には溝で周囲を囲った建物跡群が発見されている。今回検出したSB-13・14は、船頭遺跡IV地区の溝で囲まれた中にある棟方向を南東-北西にとる建物跡とほぼ同じ棟方向をとり、同時期の建物跡と考えられる。このことからSB-13・14は時期の明確な遺物は出土していないが、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。また、周囲を囲む溝は確認できなかったが、位置する場所は最も大きく削平をうけた場所であり、もともとは同様の溝が存在した可能性がある。しかし、先に述べたように中世の建物跡が少ないことは間違いない、一帯に展開していたとみられる「吉永庄」内での配置の上で、主に耕地として利用されたためともみることができよう。

II地区

縄文時代の遺跡としては、豊浦町内では、厚島遺跡、松原遺跡、法仙庵遺跡⁽¹⁾、中ノ浜遺跡周辺⁽²⁾が知られている。厚島遺跡、松原遺跡⁽³⁾については後期といわれているが、内容は明らかでない。法仙庵遺跡、中ノ浜遺跡周辺出土のものは縄文時代晩期の突帯文土器である。今回吉永遺跡II地区で出土した縄文土器は凹線文をもち岩田Ⅲ類⁽⁴⁾の範疇でとらえられる。後期後半に比定でき、内容の明らかな町内の縄文土器としては、かなり古い例である。なお、これに伴う打製石斧も出土し、周辺に縄文時代の集落の埋存の可能性もある。

土坑や包含層から弥生時代前期の壺の胴部片が出土している。頭部と胴部の境にわずかに段をもち、へら描き羽状文を施文するもので、前期後半に比定される。南の丘陵上に前期の集落が埋存するものと考えられる。また、II地区では黒曜石や玄武岩、赤色頁岩の石器及び未製品、さらに多量の剥片が出土しており、石材を搬入し集落内で石器加工を行っている。図版19-153は土器の胎土中に黒曜石の剥片が混入したものであり、ごく身近で石器製作が行われていたものと思われる。

発見された竪穴住居遺構は小型で方形プランをもち、周溝や規則的な柱穴配置はみられない。営まれている場所も増水時には土砂が流入したとみられ、一般的な竪穴住居の存在は考えにくい。埋土中から焼土や炭、石材の剥片が多数出土するほか、SX-2からはよく使い込まれ、火をうけた大型の砥石が出土している。わずかの例であるため、次年度の調査を待たねばならないが、ここでは簡単な上層構造をもつ工房の様な施設ととらえておきたい。

II地区で検出された遺構の大部分は土坑である。出土した土器から、時期は中期末～後期である。先に述べたように豊浦町は前期から中期にかけて貯蔵穴（袋状竪穴）が多くつくられる地域であるが、後期には貯蔵形態は高床式倉庫に移行するものとみられる。今回発見された土坑群は形状が不整形のものが多く、床面も凹凸のあるものが数多くみられる。この点で袋状竪穴とは大きく異なっている。また、袋状竪穴の多くが丘陵上にあり、湿気をさけるような立地を示すのに対し、II地区の土坑群は

土砂が流入する場所に立地し、多くは床面が湧水点以下にある。つまりこれらの土坑群は常に水のあたる状態にあったとみることができる。このような条件下の土坑は、一般に堅果類の貯蔵などに使われた例が多い。古代から中世とみられる船頭遺跡Ⅰ地区SK-15からはイチイガシの実が多量に出土しており、吉永周辺では後の時代まで堅果類が食料とされていたことがわかる。各方面からの慎重な検討が必要であるが、ここでは土坑群の一部が、アクぬきの必要な堅果類の貯蔵に用いられた可能性を指摘しておきたい。

鏡片の出土が伝えられる植田遺跡⁽¹³⁾は、大門古墳の位置する丘陵の南東側の断崖下に形成された包含層と報告されており、当初はⅡ地区と同一の遺跡と考えていた。しかし、Ⅱ地区では植田遺跡で出土したとされる須恵器などの6世紀代の遺物は皆無である。植田遺跡は次年度調査予定の丘陵北東の地区からの流入が考えられるのに対し、Ⅱ地区は丘陵上や西の大門丘陵側の浴槽側からの流入が大きく、内容の違いを生じたのであろう。

今回の吉永遺跡の調査の注目点の一つは、Ⅱ地区の南丘陵上に位置する前方後円墳大門古墳⁽¹⁴⁾との関係であった。大門古墳は全長36mの前方後円墳で、6世紀前半の築造とみられている。横穴式石室を主体部とし、円筒埴輪列をもつ、一帯を支配した首長墓とみられる古墳である。この古墳を築造した集団の集落の発見が期待されたが、遺構はもとより同時期の遺物すらほとんどみられなかった。隣接する船頭遺跡の調査でも同時期の集落跡は発見されていない。古墳時代の集落跡は、一般的には弥生時代の集落より低位にある例が多い。そう考えれば、周辺では丘陵の東側およびそこからさらに北側にのびる微高地上に存在するものと推定される。この範囲は次年度の調査予定地区である。(石井)

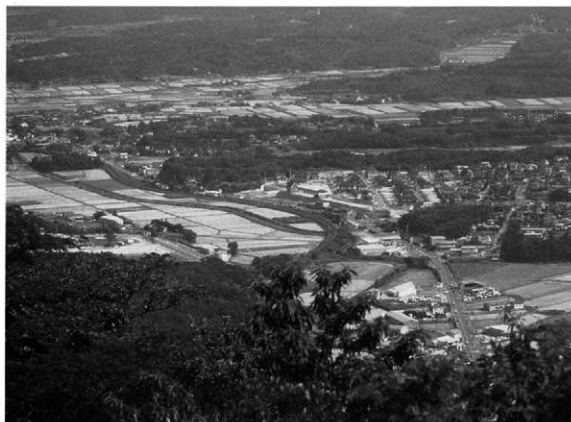
注)

- (1) 山口県教育財団・山口県教育委員会『船頭遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告 第172集、1994年
山口県教育財団・山口県教育委員会『船頭遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財調査報告 第178集、1995年
以下、船頭遺跡についてはすべてこの報告書による。
- (2) 豊浦町教育委員会『宝蔵寺遺跡』、1993年
- (3) 豊浦町史編纂委員会『豊浦町史三〔考古編〕』、1992年
- (4) 国分直一『無田遺跡と周辺の諸遺跡』山口県文化財概要第4集 山口県教育委員会、1961年
- (5) 豊浦町教育委員会『向日山遺跡』、1987年
- (6) 豊浦町教育委員会『城山遺跡』、1986年
- (7) 山口県教育委員会『日置村堀田遺跡・豊浦町吉永遺跡 埋蔵文化財緊急調査概報』、1972年
- (8) 1996～98年度、県教育委員会、豊浦町教育委員会によって調査され、1999年報告書刊行予定
- (9) 弘津史文『周防國赤松古墳並茶臼山古墳(其一)』考古学雑誌 第18巻4号 考古学会、1928年
- (10) 山口県教育委員会『木ノ井山古墳』山口県埋蔵文化財調査報告 第166集、1994年
- (11) 注(3)に同じ
- (12) 豊浦町教育委員会のご教示による
- (13) 豊浦町史編纂委員会『豊浦町史』、1979年
- (14) 瀬見浩『岩田遺跡』山口県文化財概要第4集 山口県教育委員会、1961年
- (15) 水島登夫『豊浦町植田遺跡出土の鏡片』地域文化研究所紀要 第1号 梅光女学院大学、1985年
- (16) 豊浦町教育委員会『前方後円墳大門古墳』、1991年

圖 版



吉永遺跡遠景①（南東上空より）



吉永遺跡遠景②（若草山より）

I 地区
図版 2



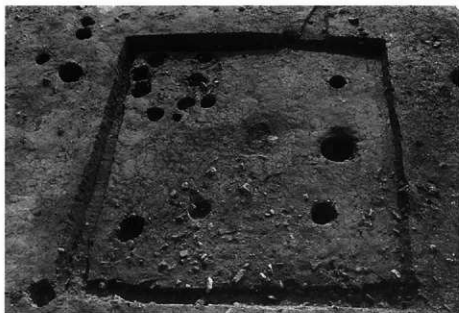
SB-1 完掘
(北東から)



SB-2 完掘
(北から)



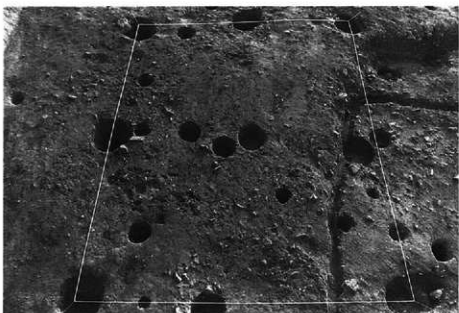
SB-6 完掘
(北東から)



SB-7完掘
(北東から)

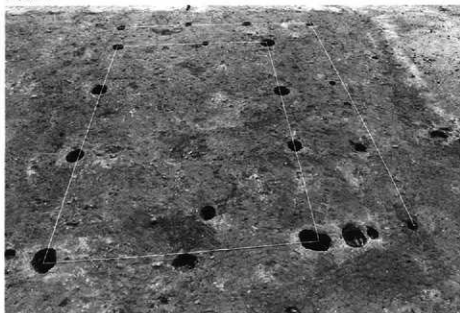


SB-8
(北から)

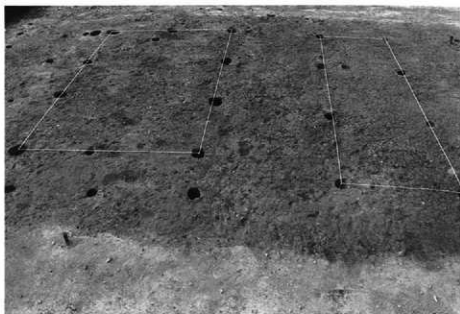


SB-10
(北東から)

図版 4



SB-13
(北から)

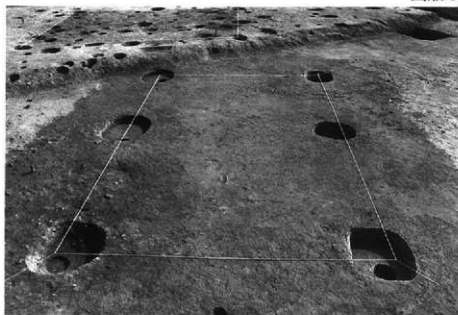


SB-13・14
(南東から)

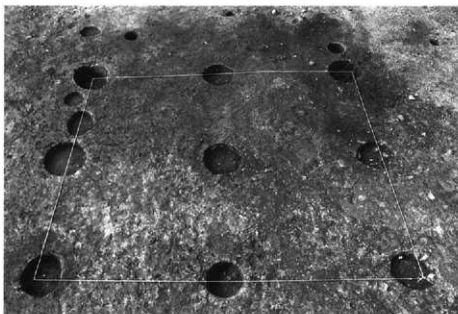


SB-13
柱根検出状況

SB-17
(北西から)



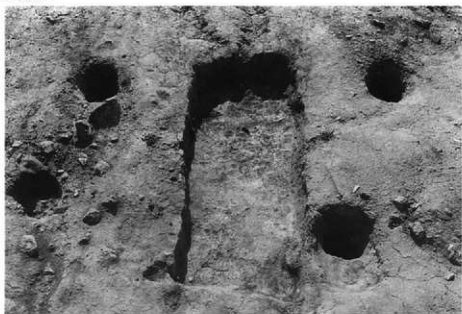
SB-18
(南東から)



SD-3
(北東から)



図版6



ST-1完掘
(北西から)



ST-2完掘
(西から)

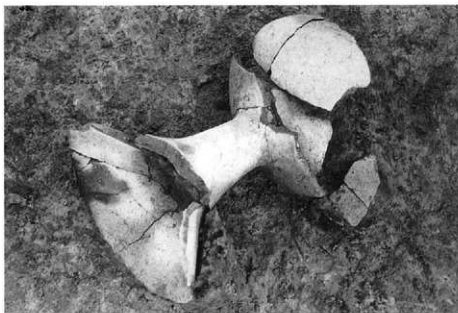


包含層
土器出土状況

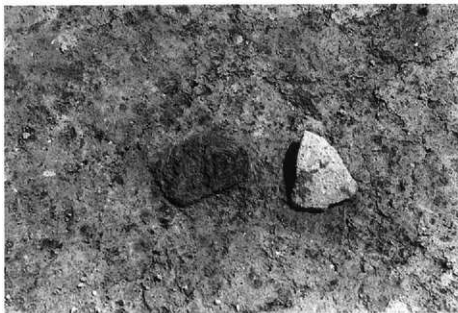
SK-15
土器出土状况



SB-1
土器出土状况

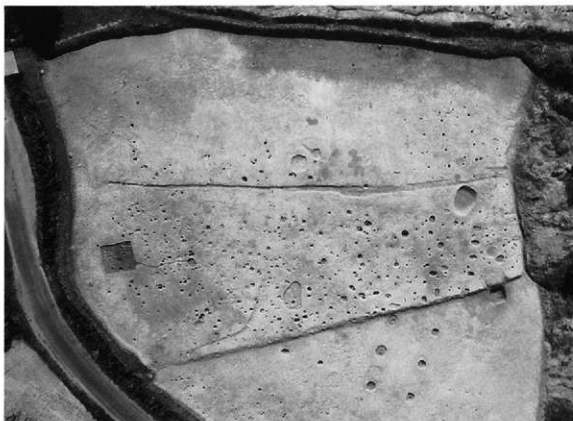


SB-2
竖梯出土状况

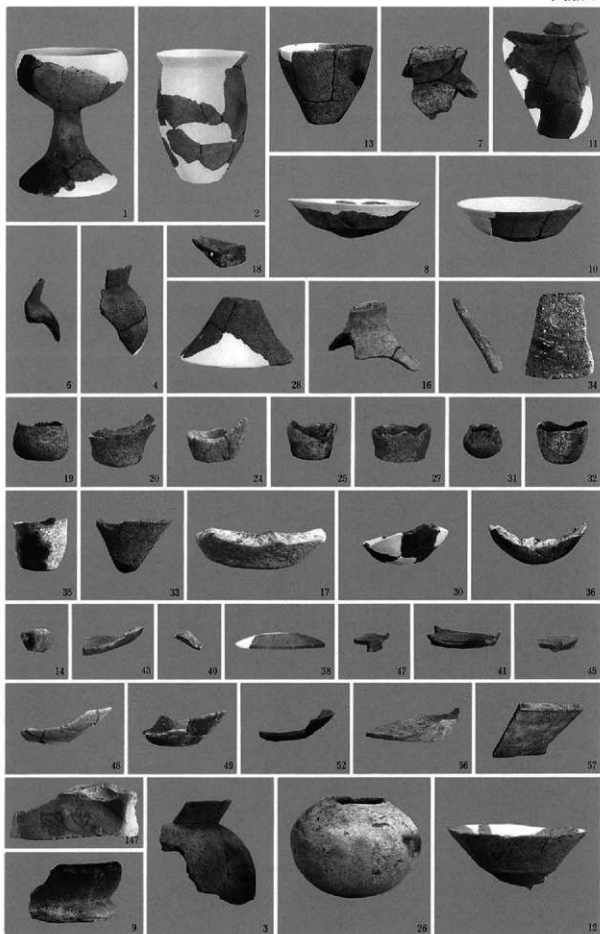




南東部発掘状況

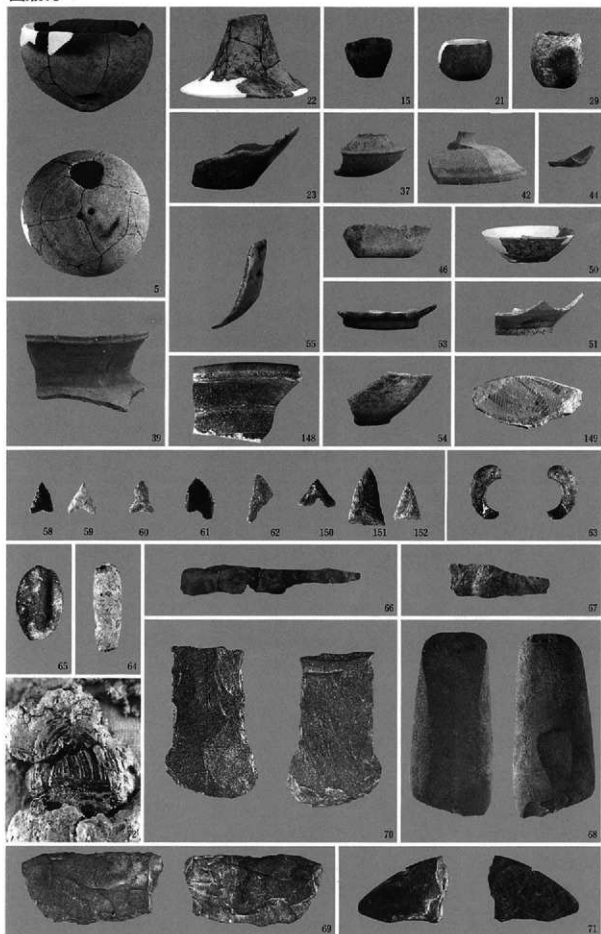


北西部発掘状況



出土遺物①

图版10





全景（北西上空より）



完掘全景（上空より）



II地区近景
(北東から)



完掘全景
(東から)



完掘全景
(南から)

S X-1 完掘
(東から)



S K-2 完掘
(北西から)



S K-10 完掘
(北東から)





SK-19
土器出土状況
(北から)



SK-20
土器出土状況
(東から)



SK-21完掘
(南から)

S K-26完掘
(西から)



S K-31完掘
(東から)



S K-37土層断面
(北東から)





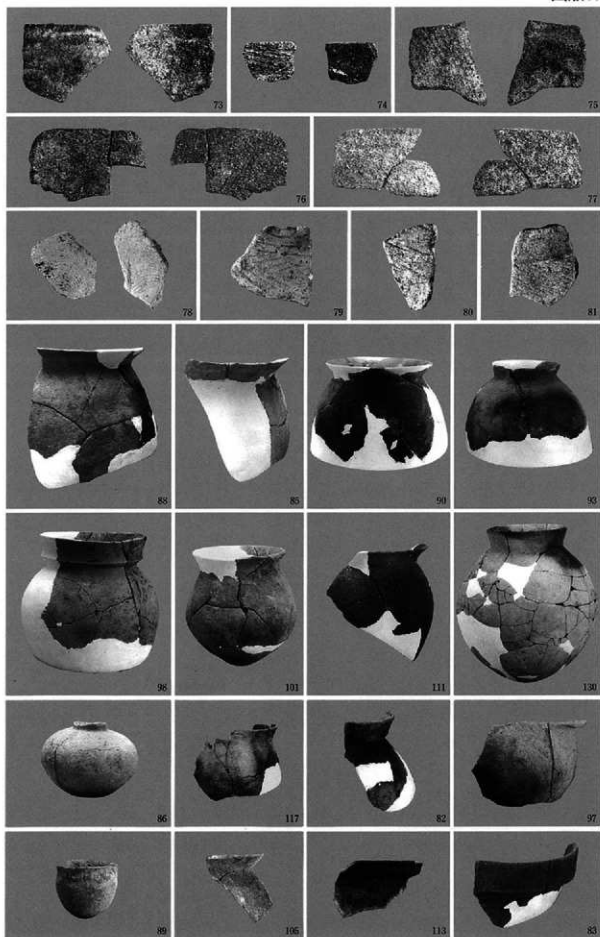
S K-37完掘
(北西から)



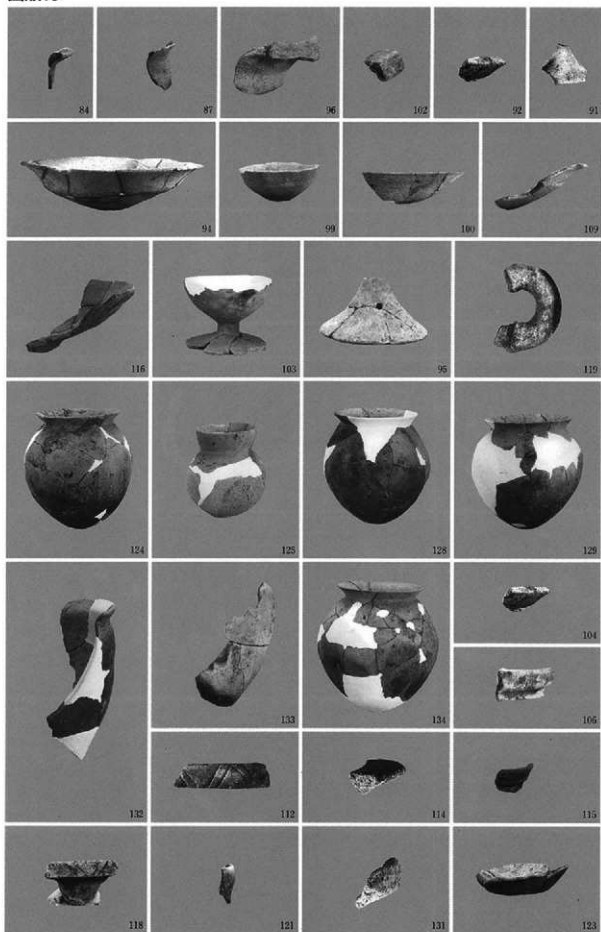
S K-38
土層断面
(南から)

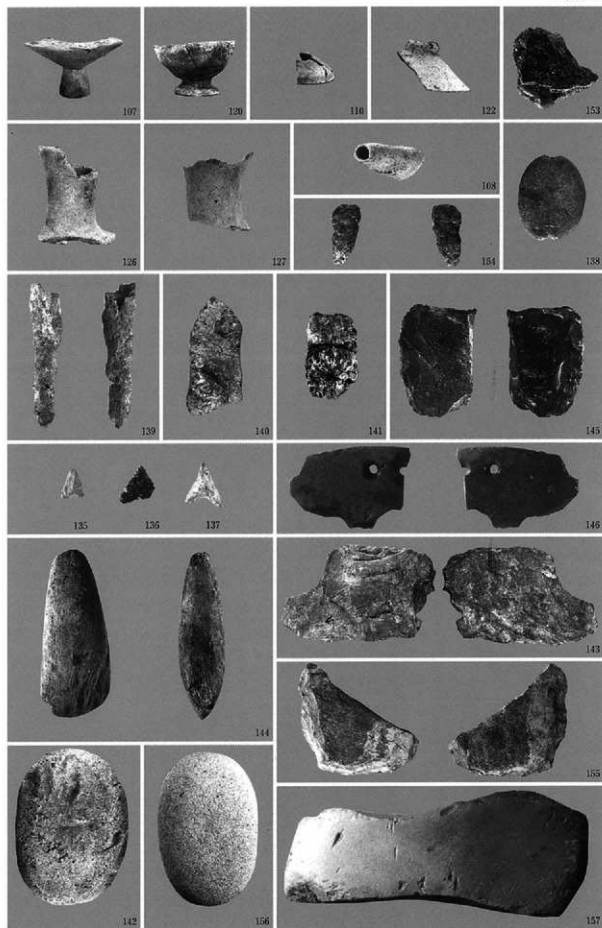


包含層遺物出土
状況(東から)



出土遺物①





出土遺物①

報告書抄録

ふりがな	よしながいせき
書名	吉永遺跡
副書名	平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第3集
編集著者名	藤川貴和 伊藤幸浩 石井龍彦
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1998年3月20日 (平成10年3月20日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしながいせき 吉永遺跡	とよなごういせき 豊浦郡豊浦町 とよなごういせき 大字吉永	35443		34°7'25"	130°55'40" (I地区) 130°55'21" (II地区)	19970506 19971114	6.500	ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉永遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	縄文土器 弥生土器	柱間4m以上の 大規模な建 物跡を検出 (I地区) 弥生時代後期 の土坑群を検 出(II地区)
			7軒	土師器	
		I	竪穴住居状遺構	須恵器	
			2基	緑釉陶器	
		室町時代	掘立柱建物跡	青磁・白磁	
			15棟	堅櫛	
		埋葬跡	2基	鉄製刀子	
		土坑	67基	鉄鏝	
溝状遺構	12条	石製品 (勾玉・鎌・庖丁・ 斧・敲石など)			



付图 1 地区道槽配置图

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第3集

吉 永 遺 跡

—平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1998年3月

編 集 財団法人 山口県教育財団

発 行 山口県埋蔵文化財センター

(山口市春日町3-22)

印 刷 兎玉印刷株式会社

(宇部市明神町3丁目4番3号)